UFOと宇宙哲学の研究誌

GAPニューズレター

No.47

日本GAP

GAPニューズレター　第47号目次

なぜ彼らは来るのか（6）・・・F・ステックリング　1
トランカス事件の全貌・・・・・・・・O・A・ガリンデス　11
リオデジャネーロ付近に出現した円盤・・・・W・ビューラー　18
ートピックスー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　22
＜新訳＞空飛ぶ円盤実見記（4）・G・アダムスキー　23
日本GAP大阪支部大会盛況裏に終了・・・・・・・・・・　32
＜予告＞昭和46年度総会を開催・・・・・・・・・・・・　34

GAPとは

GAPは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で，世界中の人々が空飛ぶ円盤の真相について〝知る〟機会を与えられるべきであるという見地に基ずいて1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました．彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して，来たるべき時代に眼を転じること，人間はすべて〝コズミック・パワー〟の御子であり，そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました．この諸法則は他の世界（惑星）から来る友好的な訪問者からもたらされた〝生命の科学〟の研究と理解を通じて体得できるものです．

日本GAPの目的は円盤とスペースブラザーズ問題を関心ある人々に伝えることにあり，奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります．その中心思想は次のとおりです．

1．この太陽系の他の惑星群から偉大な発達をとげた人類が地球を訪問しつつある．
2．他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト（接触）しており，危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている．官民を問わずスペースブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが，通常その真相は洩らされていない．
3．ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は，人類の起源と未来の運命の真実を知るのに有益である．

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく，政治・宗教と関係のない非営利刊行物です．本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです．

◎GAP参加グループを有する国は次のとおりです．
アメリカ，オーストラリア，ベルギー，ブラジル，カナダ，デンマーク，イングランド，フィンランド，ドイツ，オランダ，インドネシア，日本，メキシコ，ノルウェー，スエーデン，スイス（ABCの順．1971年6月現在）

◇表紙写真は円盤が浮上した海面を再度見つめるマチャド夫妻。詳細は本号十八ページの記事に・・・

◇本誌掲載記事はすべて翻訳転載権取得済。禁無断転載。

なぜ彼らは来るのか(6)

フレッド・ステックリング

第9章　円盤研究グループとの対談

米国及び海外の多くのUFO研究グループの活動を注意深く評価した結果、各グループのメンバーたちは宇宙人からもたらされる真の宇宙的な知識と真理を広めることを殆どやっていないという結論に私は達した。各グループの主な活動は、これまでに〝確認された〟飛行物体の目撃例の蒐集と報告を行なうことだけのようで、それだけのことなのである。

グループによっては心霊術や霊媒現象などを用いて真実をゆがめているのがあるが、実際にはそんなものは円盤が出現するはるか以前から行なわれていたことである。心霊グループにとっては、空飛ぶ円盤類をごたまぜにして彼らが使用していた〝ヤカン〟の中に投げ入れるのは便利なことだった。というのは、そのすべては彼らにとって〝未知〟を意味したからである。これは実に大きな誤りだった！　こうしたUFOグループのメンバーの多くは宇宙人とメンタル・コンタクト（注＝精神的な遠隔コンタクト）をやったと称しているが、これは完全に間違っている。なぜなら送信者と受信者が直接互いに知っていない限り、〝メッセージ〟すなわちもっとうまく言えば、個人的な想念印象なるものをテレパシーによって認めることは不可能であるからだ。テレパシーの法則を正しく働かせるには相手の姿や顔つきを鮮明に心の中で描くことが必要である。これはテレビジョンの原理にたとえられる。俳優が自分の像をカメラで記録して放送してもらうには、テレビジョンのスタジオへ直接に出現しなければならない。肉体を持つ俳優がいなければ動く画像は送信されない。だから直接に会ったことのない宇宙船の乗員とメンタル・コンタクトをやったと称する人たちは、実際には自己催眠のかたちによって情報を得ているのである。しばしば自動書記現象（注＝心霊術の一現象。死者の霊が乗り移って文字を書かせると信じられている）やウイジャ・ボード（注＝霊界通信用の文字板）などは望ましい結果を得るために使用

されるが、これに頼ると真の情報を得ることはできないのである。宇宙人は〝霊魂や幽霊や亡霊〟などではなく、この種の神秘主義を奨励もせねば認めもしない。以前に述べたように、宇宙人は我々と同様に食物を食べたり空気を吸ったりする〝肉体を持つ人間〟なのである。彼らの宇宙船は我々の潜水艦に似て気密化されギ装しているのだ。だれか地球人が宇宙的な分野で奉仕をするかもしれないと宇宙人が感じる時はいつでも本人にコンタクトし、本人の使用する言語を用いて本人に話しかけるのである。

ある時、宇宙の原理の正しい伝え方に関する私的な会合が開かれたことがあった。或る有名なUFOグループのリーダーたち数名と共に三時間のディスカッションが行なわれたのである。まず一人の婦人が私に質問を放ってディスカッションを始めた。

「他の世界の人々を満足させ喜ばせるためには、私たちは個人としてグループとして何をやったらよいでしょうか。どのように振舞うべきでしょうか。そしてどんな計画を立てればよいでしょうか？」

私は答えた。

「こんなふうに申しましょう。大気圏外の生命に関する事実を広めるのに私たちが良い事をしようと悪い事をしようと、それは我々自身のために我々の文明のためにやるのであって、宇宙人のためにやるのではありません。彼らは高度な生命の段階に到達しているのですが、地球上の人間は改善のための最初の段階にさえも殆ど達しておりません。私が話し合ったことのある、そして今もなお時折話し合っている宇宙人たちは、もう一度地球人に〝自然〟の法則、すなわち原因と結果の法則を気づかせようとして来ているのです。私たちは、彼らの道徳の基準は〝宗教〟とは言えないという事実を心得る必要があります。たとえば我々が兄弟の保護者になることは道徳の法則であって、宗教の法則ではありません。私の申し上げた事がおわかりですか？」

「わかりました」と別な婦人が口を出した。「よく理解できました」

私はつけ加えた。「宇宙の友人たちは私たちの意志に反する事を決して強制的にやらせようとはしません。しかし彼らは我々がエゴたる自分の意志でなく〝神の意志または法則〟に従うべきだという事実に気づくようになることを非常に望んでおられます。こうしてこそ私たちは宇宙の果実をつみ取ることが期待できるのです。選択は全く我々次第です。もし我々が宇宙人のもたらした知識から恩恵をこうむろうと思えば、この知識を学んで日常生活に応用するように努力する必要があります」

「あなたは〝生命の科学〟講座について話をされましたが、これは研究すべきものなのですか？」とテーブルの上座にいた頑丈な人が尋ねた。

私は答えた。「その講座は多くの人にとってたいそう有益になるでしょう。というのは、それは個人が真自我を〝知る人〟になるのに役立つからです。〝テレパシー〟講座（注＝アダムスキー著。邦訳は文久書林刊）も真剣な研究者があらゆる生命体のあいだで行なわれている〝自然〟のコミュニケーションの機能を理解するのにすばらしく役立つ書物です。私は友人のジョージ・アダムスキーやスペースブラザーズ（宇宙人）との個人的体験から、これらの書物に述べられた法則を広めたり応用したりしようとするグループまたは個人ならだれでも宇宙人が支持して下さることを知っています」

私はちょっと沈黙した。

「そうすると円盤の目撃は全然重要ではないように思われますが――実際、全く無意味なのですか？」と別な婦人が口を出した。

「そのとおりです」と私は続けた。「世界中の無数の目撃は今までに

円盤の存在を証明しました。みなさん方のなかにはまだ目撃していらっしゃらない方もあるでしょうが——。だが、あなた方の一体幾人の人がオーストラリアへ行ったことがありますか？」

だれも答えなかった。

「しかしみなさんはオーストラリアが存在することを信じておられるでしょう」と私は尋ねた。

「信じています」と一同が答えた。

「まだ行ったことのない場所を一体どうして確信できるのですか？」

「私たちはあなたが伝えようとしておられる事が理解できます」と頑丈な紳士が言った。

「そうすると、実際にはＵＦＯの目撃報告はもう意味はないということにみな同意されますね。あの宇宙船というのはただ訪問者のための輸送手段にすぎないのですよ。それだけのことです」

私のそばにすわっていた若い婦人が、それまでは全然発言しなかったが、突然言った。

「疑う人でも一ダースの宇宙船を見ることはできますが、それでも本人は文句を言って疑うでしょうね」

「全くそのとおりです。人々が宇宙船をひんぱんに、しかも非常に大きく見た場所で私も見たことがありますが、人々はあとで『あれはソ連の物か、それともドイツかアメリカの秘密実験機かもしれない』と言っていました」と私は続けた。

「あなたは宇宙人と前もって目撃を打ち合わせることが可能ですか？」と頑丈な紳士が質問した。「つまりグループと共にどこかで、たぶん森の中で待機して、みんなで一緒に宇宙船を見ようという寸法です」

私は答えた。「できません。宇宙人と目撃や着陸を打ち合わせることは不可能です。彼らはそんな事を決してやりません。地球上ですばらしい仕事をやっておられるこの人々は、空中で我々を楽しませることよりももっと重要な仕事を持っているのです。時々我々が宇宙船を見るのは目撃者がたまたま適当な時に適当な場所にいるからです。宇宙人は非常にすぐれた理由がなければ何事もやりません。地球人のなかには宇宙人からもっと多くの証拠を——もっと多くの目撃と活動を——必要とすると言う人もあります。しかし我々が彼らの働きぶりや生活ぶりを理解すれば、こんな種類の質問をする必要も欲求も起こらなくなるでしょう。彼らが地球に来るのは全く自発的なもので、〝平和部隊〟によく似ています。彼らは地球人がいわばひどい頭痛を持っていることを知っていて、その治療薬を与えるために来るのです。それによって我々は自分たちを自分の苦痛から救い出せるのです。地球人がその薬をのみさえすれば、です。前述のように、宇宙人は知識という食物を与えてくれるのですが、我々がそれから恩恵を受けようと思えばそれを食べねばなりません。宇宙人が我々にかわって食べてはくれないでしょうし、またそうすることは不可能です。これはナザレのイエスが語った言葉を思い出させます。『シルシを求めようとする人々にシルシは与えられない』私にはこれは全くあの高貴な宇宙人がやっている方法のように思われます。ですから証拠としてシルシを持たねばならない人々にシルシを与えないからといって私は宇宙人をいささかも非難することはできません。自己の内部に多少とも理解力を持つ人々は、再度申しますと、自己の内部から気づくことによって真実を認識するでしょう」

ここで私は言葉を切った。だれかが発言したがっていることを感じたからである。

私のそばにすわっている例の小柄な婦人が見上げて言った。

「私はまだ〝生命の科学〟講座の内、数課を学んだだけで、次の課を待ち望んでいます。この講座に盛られた知識はただ一つの目的を持っています。それは各人がより以上にすぐれた、より以上に知覚力を持つ人間になるのを助けることにあります。それは、兄弟愛をもって他人に奉仕することを私に気づかせ、それによって創造主に奉仕することも気づかせました。より良き人間になるためにこれ以上の証拠を必要とするでしょうか。現在私たちにもたらされている〝生命の科学〟の教えは充分な証拠ではないでしょうか？」

他の人は多大の興味をもって聴いていた。

「あなたが〝生命の科学〟についてそんなふうに感じておられるのはうれしいことです」と私は言った。

テーブルの他端にすわっている別な紳士がメガネをはずして私に話しかけた。

「宇宙人が持っているかもしれない肉体上の問題について少し話していただけませんか。つまり、彼らは私たちと同様に病気になるのですか？」

私は答えた。「こんなふうに説明したいと思います。あなたはこの前の会合で、懐妊期間中の彼らの振舞と、生命に対する彼らの精神的態度についてお話したのをおぼえていらっしゃるでしょう」

「おぼえています」と紳士は言った。

「この懐妊期間の段階で不完全な肉体は排除されます。いわば家（肉体）は何らの手っ取り早い方法を用いることなく建てられたわけです。肉体の構造や機能に関する彼らの知識は非常に進歩していますから、もし何かの不調が起これば大抵の人は自分で治すことができるのです。しかし治療の目的で特に作られた機械も持っています。たとえばテレビ受像機程度の大きさの或る機械によって、週に二度、肉体の分子構成の〝再調整〟が行なわれますし、同じような器具によって骨折などは殆ど瞬時に治すことができます。これらの機械は宇宙人の各家庭にそなえてあります。彼らは老化の恐怖をもって生きているのではありませんが、非常な高年に達すると白髪になる人もあります。しかしハゲは彼らの惑星では知られていません。入れ歯やメガネも使用しません。

金星の住民は我々が映画スターでも見るように必ずしもすべてが肉体的に美しくは見えないかもしれません。しかし彼らの肉体からは内的な美と幸福感が流れ出ており、心配や心の不調などはありません。だから実際には彼らは我々が想像し得るより以上にはるかに美しいのです。彼らは他人のまねをしようとはしないで自分のありのままであろうとし、謙虚な感謝の気持で奉仕し、肉体を常に生ける神の神殿とみなしています。

私は他の世界から来た数名の婦人と会う喜びを得ました。それでこの婦人たちは化粧をしないし、化粧品も用いないということを断言できます。このような物は必要ないのです。髪を染めたりすることもなければ、自然のまゆ毛をそり落として人工のまゆ毛と取りかえることもしません。彼らはコンプレックスを持たず、また自信喪失のために苦しむこともない。というのは自分の肉体に欠点を全然見出せないからです」

「彼らの衣類はどうですか？どんなスタイルのものを着ているのですか？」と別な婦人が知りたがった。

「気候状態に応じて肉体を保護するために衣類を用いるのです。気候が異常に暑い時はどんなタイプの衣類も着ないで、自然のままに見られることを恥ずかしがりません。肉体のすばらしさに対して偉大な尊敬感を持っているからです——肉体は神の最大の業績ですから。結局、衣類

というものの根本目的は肉体の保護にあって、それを隠すことではないと思います。彼らは創造主と社会とを混同することなく、ゆえにそれぞれに応じて生きています。約五時間ほど金星を訪れる特権を与えられたアダムスキー氏は、彼らの衣類は東洋人が着ているものにスタイルの点でたとえられると言っていました。また時にはこのアメリカで一般人が着ているものにも似ていると述べています。宇宙人が地球にいる時は私たちが着なれているものと全く同じものを着ています。当然のことながら、これは自分の正体を気づかれないようにするためです。彼らが地球上に長く滞在する場合は、やはり我々と同様にカゼをひいたり感冒にかかったりします。しかし病気がひどくならないうちに治すため、定期的に自分の惑星へ帰るのです」

この時一同は昼食をとるために短時間の休憩に入った。みんなが食べている時、テーブルの向い端で行なわれている会話が耳に入った。

例の頑丈な紳士がみんなに聞こえるように声を張り上げて言った。

「もし我々が金星人が持っているような機械装置を持っていれば、我々の病気に関する悩みはすべて解決するとは思いませんか？」

例の小柄な婦人（生命の科学について発言した人）がイスから立ち上がって、柔らかい声で次のように述べた。

「みなさん。そのような機械は現在以上に多くのトラブルを起こすと思います。なぜなら沢山の医者や看護婦や病院で働く無数の人々が失業することになるからです。このために確実に世界的なインフレーションが発生するでしょう。そんな機械があればだれも医者の必要がなくなるでしょうから——」

ここで私は微笑せざるを得なかった。これは確かに筋の通った考え方であるからだ。

「私の申すことは正しいでしょうか？」と彼女は私に尋ねた。

「正しいです」と私はうなずいた。「そういう事はあるでしょう。アダムスキー氏が語ってくれたところによりますと、同様の機械がすでに東海岸の或る一流病院の実験部門で使用されました。しかしその機械を宇宙人からの贈り物として受け取ってから十五年以上になるのに、それが使用されている光景をどこへ行っても見たことがありません。その機械は一九五〇年代の始めに与えられたものです。しかも私が知る限りでは現在まだ実験段階を出ていません」

話されている事柄のすべてを聴いていた若い婦人たちの一人が発言し始めた。

「私の夫は電気技師です。少し前に彼がわが家のファミリー・ドクターと話し合っているのを聴いたことがあります。その話題は〝電気機械としての人体〟というのでした。たしか約一・五ボルトの電気が絶えず肉体内部で発生しているということです。この事は人間にテレパシックな想念を送る能力があることを気づかせます。なぜなら一・五ボルトならば、テレパシーを可能とするのに充分なパワーを生じることになるからです」

きわめて熱心に聴いていた頑丈な男が婦人の言葉を支持して言った。

「想念は電気的な波動であって、超感覚的な受信者によってキャッチされます。もし想念をうまく形成すれば、です。私は或る航空研究所で働いていますが、そこで以前にこの問題が考えられたことがあります」

この対談は一般人にとって興味深いと思われる問題に触れたので、私はアダムスキー氏がしばしば語ったことのある、この最重要な発見に関して自分の意見をつけ加えたくなった。

私は述べた。

「我々の肉体内部で発生した電気はアースとなるべき脚の中へ直線で流れます。アースは必要です。ところが合成ゴムやゴム底のクツが出まわるようになって以来、我々の肉体は地面と絶縁されるようになりました。そのため、絶えず発生する電気エネルギーは体内に蓄積されて、アースを妨げられた力線はジグザグの形で体内にはね返ってきます。するとこの力線が、下へ流れる直線と交叉するたびにいわゆる〃ショート〃が起こり、そのために非常に微弱ながらもフラッシュが発生するのです。しかもこのショートによって我々には未知の、かなりの数の肉体細胞が燃えるために、肉体内に不健康な状態が生じます。肉体は通常この破壊されて死滅した細胞を処理して外部へ押し出しますが、もし数千の細胞が破壊されるならば、数年間肉体内の或る組織の〃汚染〃が生じます。これを我々は〃ガン〃と呼んでいるわけです。他の惑星の人の話によりますと、合成ゴム底のクツが市場に出まわって以来、ガンの発生が三倍になったということです」

「皮グツはどうですか——安全ですか?」と一人の婦人が知りたがった。皮

「当然、安全です」と私は言った。「動物の皮は電気を絶縁しません。合成ゴム底でも工夫して作れば安全になるでしょう。その場合、クツが正しくアースとなるようにクツ底に針金を組み込めばよいのです」

「クツの内側から底へ画鋲を突き刺して、のぞいた先端を曲げておけば同じ効果があるのではないでしょうか」と頑丈な紳士が言い足した。

私はうなずいて言った。「たしかに効果があるでしょう。これなら高価な皮グツを買う余裕のない人は助かるかもしれません。これだけは言えます。つまり、私は今までずっと皮グツをはいてきましたので、私の足は燃えなくなっていて、そのためあまり足の疲れを感じないと。この燃焼はたしかにエネルギーの蓄積の結果です」

以上の知識が全く重要であることに全員は同意した。これからは自分のはくクツがアースの役目をしているかどうかを確かめることにしたいものだ。

編者注=右の説について本会幹部で電磁気専門家の安斎純夫君に調査を依頼したところ、同君が勤務するセンターにおける調査結果を次のように報告してきた。

「東京都立工業技術センター光音部電熱静電研究室の中村康宣技師による説明だと大体次のとおりである。

1. 人体に発生する電圧が一・五ボルトについては、現在の測定技術ではまだ不可能だと思うし、まだ私はその測定データを見たことはない。であるが、金属において発生する接触電位差が一・五ボルトである所から類推すれば、人体の電圧が一・五ボルトであるということは考えられることである。

◎接触電位差というものは、あらゆる分子はエネルギーをもっていて、その原子間に位置的接触が行なわれる時に、接触する原子間に、接触したために電子の軌道がゆがめられて、それらの原子のエネルギー状態が増加し、一方は減少して、その分子間にエネルギーの差ができる。このエネルギーの差が接触電位差となる。エネルギー差のために原子間に電子の移動が起こり電位差が生じるものと考えられる。

2. クツの絶縁性については、当所センター職員がはいているクツの絶縁抵抗値を調査したデータがあるので、おめにかけると次のとおりである。

合成グツ	新品	10の12乗オーム
	中古品	10の11乗オーム
皮グツ	新品	10の8乗オーム
	中古品	10の6乗オーム

ただし中古品は一ヵ年位経たものである。

実験によると10の9乗オーム以下の絶縁抵抗値だと人体の帯電がもれることが判明している。

以上のような説明を得られたので御報告いたします。(文責・安斎純夫)」

右の調査によって皮グツは絶縁抵抗値が低いことがわかり、本文記事中のステックリングの説の正しいことが証明される。ただし皮グツをはけば万病が治るという意味ではないから誤解なきようにお願いしたい。この場合は、皮グツの使用は病気発生の予防に効果がある（らしい）という程度である。

ここで話題を変えた。

「私には一人の叔父があるのですが、それが宇宙人について全く混乱した考え方を持っているのです」と別な婦人が述べた。

「あなたがしばらく前に叔父さんの事を話しておられたのを私はおぼえていますよ」と私は確認した。「しかしなぜ今日ここへお見えにならないのですか。その方のトラブルの解消をお手伝いできたのですがね」

「でも叔父は私たちが夢をさまさせるのを気にしていましたわ」と婦人は答えて言った。

「叔父さんの今度の悩みは何ですか?」と私は尋ねた。

「バカらしい事かもしれませんが、叔父はどこかのグループから、宇宙人は時たま私たちの体内へ入り込んで、本人がやりたくない事をやらせるらしいという話を聞いたのです」

一同は笑わないわけにはゆかなかった。

「叔父にどんなふうに話してやればよいでしょうか?」と彼女は尋ねた。

私は答えた。「宇宙人は幽霊ではないので、他人の体内に入り込むようなことはしないと説明してあげなさい。しかもそんなことはできもしない事です。宇宙の自然の原理に反するからです。少なくとも〝家〟すなわち〝肉体〟が人間によって使用されている限りは——。地球へ来るために数百万マイルを旅するこの人々は、混乱や神秘を作り出したりすることはなく、むしろそれをはっきりさせるために来るのです。彼らは地球人の混乱した心についても知っています。また地球人の心が恐怖や迷信によって促進しようとしているとんでもない物事についても知っています。我々は殆どの地球人がこの点で苦しんでいることを知らねばなりません。近隣の惑星から来る訪問者は宇宙の法則に従って働いているのであって、法則には決してそむいてはいません。我々がもう少し自分の心や想念のパタンをコントロールすることを知るならば、多くの筋の通った答が突然にやって来て我々の注意をうながすでしょうし、混乱の状態を是正するでしょう。自然の法則に反して働くのは我々の意志とエゴです。しかも如何なる事があっても我々はこんな状態を他の世界の人々のせいにすることはできません。

私たちの肉体内にはセンスマインド（すなわちエゴ）と意識（すなわち創造主）以外には何も存在しません。私たちが自分のセンスマインド（エゴの心）を意識の指導にゆだねるほどに謙虚になるならば、そしてその指示どおりに行動するならば、私たちの恐怖はただちに解消するでしょう」

その日としてはかなり遅い時刻となっていたので、一同はいつの日か再会することにきめた。別れの挨拶の後、私たちは出て行った。

私は居室に一人で寝イスにくつろいだまま、その夜の始め頃に録音されたテープのあちこちを聴いていた。その夜の対談を本書の原稿にしようときめたのはその時である。話題となった諸問題や事実談などは多くの人にとって興味あるものだと感じた。これらは今後しばしばくり返されることになると思われるからである。

次章へ進む前に、アダムスキー氏が宇宙の友に関して数冊の質疑応答書を出していることを述べておきたい。その書ですでに解答が述べてあ

る問題をくり返すことは避けることにする。（注＝この質疑応答書は五分冊から成るもので、編者はすでに入手していたが、類似の内容がアダムスキー関係の各種文献に出てきて、それらは大半紹介済なので、質疑応答書の翻訳は本誌に掲載しなかった）

第10章　質疑応答

私がこれから最善をつくして答えようとする各質問は、ヨーロッパその他における私の講演旅行中に提出されたものである。講演を行なう時はいつも長い質疑応答の時間を設けているが、これは聴衆に対して彼らの心中にある問題や私が講演中に述べなかった問題を表明する機会を与えるためである。

問　あなたは一九五二年十一月二十日に起こった有名なアダムスキー・コンタクトは、当時広く知れ渡ったと申されましたが、ルッペルト大尉の著書〝未確認飛行体〟を読みますと、その中に一九五〇年頃から一九五五年にかけて発生したＵＦＯ活動が列記してあって、当時大尉はプロジェクト〝トゥインクル〟と〝ブルーブック〟の責任者であったわけですが（注＝以上は米空軍のＵＦＯ調査機関）、おかしなことには、あの有名なアダムスキー・コンタクトは記載してありません。その理由を説明して下さいませんか。

答　理由は次のとおりです。一九五二年十一月二十日に米空軍は他のＵＦＯ目撃事件には手を触れないで、ただデザートセンター付近における地球人ジョージ・アダムスキーと金星から来た一人間との直接の会見だけを取り扱っていました。この偉大な事件の内容について後に宣誓書を提出して署名した六人の目撃者もその場に居合わせました。ところが、もし空軍がこのコンタクトの事実を公然と認めたならば、空軍は科学的にも社会的にも偉大な進歩をとげた人類が住んでいる他の惑星を認めねばならなくなります。またそうすると、空軍は宗教や聖書の物語などと関連した別な惑星の人々の地球訪問をも認めねばならなくなります。

このコンタクトの時には空軍は全然認めるつもりはなかったのだろうと思います。認めれば地球人の考え方を確実に妨げることになるからです。ゆえにこの情報は公表を許可されませんでした。

空軍が驚いたことには――私は今ここで証言しますが――たぶん故意にではないでしょうが、ライトパタソン空軍基地の一人の将校が、ワシントン州シアトルの一紳士に次のような手紙を書きました。この紳士はカリフォルニア州デザートセンターの例の事件の確証を求めていたのです。

一九五六年八月

一九五六年七月十八日付の貴翰に対する御返事として、プロジェクト〝ブルーブック〟特別報告第十四号の大要を同封します。これは一九五五年十月に発表されたものです。この完全報告には今日までのあらゆる報告が列記してあり、その中にはカリフォルニア州デザートセンター付近で一九五二年十一月二十日に空軍の一パイロットから提出された報告も含まれています。

特別報告第十四号はカリフォルニア州ロサンジェルスで入手できますからお調べ下さい。

敬具

一九五六年八月

米空軍大尉・副官補

ウォーレス・W・エルウッド

オハイオ州ライトパタソン空軍基地

空軍情報技術センター

ワシントン州シャトル九九、第九番街

リチャード・O殿

デザートセンター事件に対して空軍が少なくともわずかばかりの承認を与えようという決定をするまでに殆ど三年間を要したとみなすのは困難ではありません。

一九六七年三月二日付のワシントン・デイリー・ニューズ紙に、〝UFOにはそれ以上のものがある〟と題した記事が掲載されましたが、それの中に次のような報告があります。

「アリゾナ大学の物理学者ジェームズ・E・マクドナルド博士は、タクソンで次のように言明した。『未確認飛行体の報告を調査している米空軍ティームはUFO問題をごまかしてしまった。というわけは軍の調査で示されたものよりもおそらく十倍もの不可解なUFOが出回るからだ』博士は空軍の調査を〝浅薄で無能〟ときめつけている」

問　UFOの中から出てくる怪物の話についてはどうですか。これらは主として南米大陸から出てくる話なのですが——。数度にわたって、私は人間のような生き物やその敵対行為について聞いたことがあります。これについては真ぴょう性がありますか？

答　地球人が他の惑星から来た人々に対して示したのが今までの唯一の敵対行為です。大抵の場合はロボットが怪物として記録されました。これらの金属性のロボットは全く人間のように見えます。すなわち直立して歩いたり、金属の前額部のまん中に一個の電子眼がついていたりします。このロボットは科学目的に使用されるのですが、それは我々が原子力委員会の各工場で使用しているロボットと同じようなものです。（UFOから出てくるロボットのなかには）小型ロボットで、細く見える金属の腕と脚を持ち、高さ三・五フィート位で、しかもあらゆる種類の仕事がやれるのがあると、しばしば報告されています。当然、みな遠隔操作によるものです。

ここでふたたび思い起こす必要があります。地球人は未知の物を恐怖し、この恐怖のために気が転倒してしまい、あらゆる種類の途方もない物を報告するようになります。南米の或る人々が、UFOからのぞいた頭部に全然毛髪のない一匹の生き物を見たと報告しました（この生き物はマユ毛やマツ毛さえなかったのです）。一方、同じ国の別な現地人は、UFOのパイロットで小柄な人間に似た生物を見たと報告しました。これの頭部と腕全体に毛が生えていて、長いアゴヒゲもあったということです。これらはみなナンセンスです。

一九五〇年代の初期に科学研究用として宇宙開発科学者がサルを使用しました。そして数匹のサルが実験用に宇宙空間へ打ち上げられました。もしこのサルがちょうど地球のそばを通過中の宇宙人たちによって観察されたとすれば、彼らはホーム惑星へ帰ったあとで、地球の最も知的な生物はサルであると報告するかもしれません。ですから我々はUFOの

報告類には注意する必要があります。

問　宇宙人は物質化したり非物質化したりできるのですか。（注＝空間においてみずから消滅したり出現したりできるかの意）

答　絶対にできません！　時には或る機械装置を用いて肉体や宇宙船を見えないようにすることがありますが、これは光線を物体の周囲に放射することによって行なわれます。このプロセスはアルバート・アインシュタインの〝統一場の理論〟に似ています。つまり七千オングストロームのスケール以上で振動する物体は我々の肉眼には不可視となるのです。しかし物体は依然として存在しているのであって、触れて感じることができます。ベンチレーターの羽根の例をあげてみましょう。静止している時は羽根は眼に見えますが、回転していると殆ど見えなくなります。約四千バイブレーションのオングストローム・スケールの可視スペクトルから、電気スイッチを入れて七千バイブレーション以上に上げたわけです。しかし羽根は依然としてそこに存在するのであって、指で試してみれば確かに感じることができます。

問　月の構造や環境について天文学者連はまだ旧態依然たる諸説を支持しているのですか。

答　いいえ。新発見の殆どは当分の間秘密にされますけれども、学者たちは月面に水や水分が存在することを少なくとも認めています。〝死の天体〟説も誤っていることが米国のサーベヤー一号とソ連のルナ九号によって立証されました。実際、コパル教授は科学雑誌〝アストロノーティック・アクタ〟において、月の構成物の一部である水分が月の表面全体に置かれたとすれば、月の全表面を覆う九百フィートの深さの海ができるほどの水がたまるだろうと述べています。しかも米航空宇宙局は〝スタグ〟誌一九六六年九月号で、将来宇宙飛行士によって月の岩石から酸素が検出されるだろうと報告しています。だから月には水と空気があるのです。

問　大気圏外から人間が地球を訪問しつつあるという事は否定できないらしいということになれば、その人々は宇宙基地として月を使用しているのですか。

答　まさにそのとおりです！　彼らは長いあいだ月面上に基地を持っていました。月には今までずっと宇宙基地（複数）があったのです。多くの天文学者は〝キノコ型〟のポータブル宇宙ステーションを発見しています。それらは直径一千フィート以上もあるようで、なかには数マイルの長さに及ぶものもあります。アメリカの人工衛星オービター二号は地球へテレビ画像を送信してきましたが、それによると、これらの〝アワのような〟気密化されたステーション（複数）を示しています。たとえば英国の天文学者、故パーシバル・ウィルキンズはその著書〝我らの月〟の中で、月面上のこれらの神秘的な出来事を指摘するために一章全部を費しています。直径が六十マイルあるガッセンディー火口はむかし建設されたこのようなステーションを示しています。私は百インチ望遠鏡で三十年前に撮影された、これを証明する写真を所持しています。

ウィルキンズは日の出前の月面の暗い火口（複数）中で点滅して移動する物体（複数）を報告していますが、これはしばしばわずか数秒で数百マイル離れた別な火口へ移動します。また、以前には全然見られなかった橋（複数）が突然出現して、数週間後に消滅することがあります。天文学者ウィルキンズは、自分はこれらの物体に命名はしない。むしろ読者にまかせようと言っていますが、これは実に賢明な態度です。

（第一〇章未完。以下次号）

トランカス事件の全貌

オスカー・A・ガリンデス

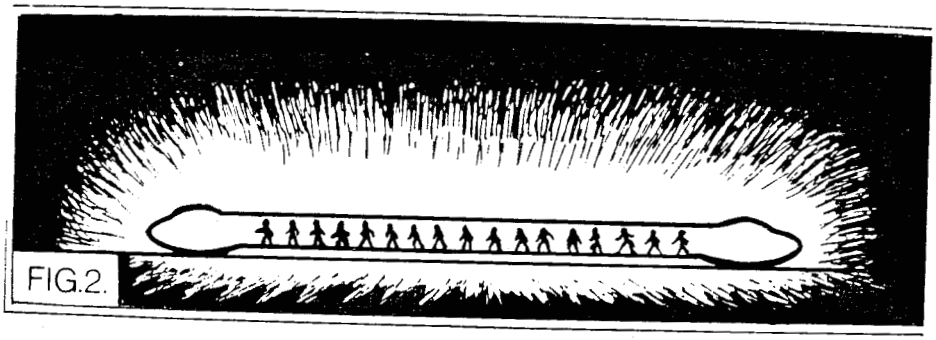


FIG.2.

トランカス事件はUFO問題の全歴史中でおそらく最も異常な出来事の一つである。目撃者の数と質ばかりでなく、事件自体の特徴や同様のタイプの他の事件との酷似性などからそのように言えるのである。

これが発生した当時、アルジェンティンの新聞は事件についてきわめて短い、しかも否定的な記事を掲げた。各新聞社もこれに「右へならえ」をしたために、その結果記事内容に同様の欠点が生じたのである。

目撃者たちの認められている正直さを全然疑うことなく、むしろこのケースはもっと徹底的な調査を行なう価値があると考えたわれわれは、事件発生以来七年の才月を経た今日、その再調査を試みる必要があると感じたのである。我々の私的な調査の結果は確信のもてる肯定的なものとなってきた。というのは、親切にも本稿に眼を通してチェックしてくれた関係者の一人の口から直接に聞き取った、完全にしてかつ真実なるパノラミックな全ぼうを提供できる喜ばしい立場に我々はあるからである。

仕事（飛行機の墜落調査）のためにアルジェンティン各地への旅行の一つの途次で、我々のUFO研究グループのリーダーであるアルベルト・マヒモ・アストルガ氏は、一九七〇年のさなかにトゥクマン市にいた。UFO現象に関心ある人間のこととて、彼はこの驚くべき目撃事件に関して陸軍軍人達のあいだで調査を行なう機会を得た。そして結局モレノ家と縁続きの一陸軍将校と会見した。この将校が親切にもトランカスの目撃者の一人で、現在はコルドバに住んでいるヨリエ・デル・バリェ・モレノ夫人宛の紹介状を書いてくれたのである。この状況はトランカス事件の再調査をしようという我々にとってこよなく有利になった。とい

うのは私の父も私もコルドバに住んでいるからである。

例の紹介状のおかげで我々は目撃者と個人的なインタビューを準備することができた。このインタビューは一九七〇年十月二日に行なわれた。出席者はその婦人とアルベルト・アストルガ氏、私の父のベンハミン・ガリンデス、それに私である。

セニョーラ・ヨリエ・モレノはアルジェンティン軍隊の或る有名な軍人にとついでいるが、彼女の夫の要望により軍にいる手前からして何かのトラブル発生を避けるために、彼女の娘時代の名前を使用することにした。

報告

ヨリエ・モレノ夫人は現在二十八才で、二人の子供がある。彼女は高等教育を受けた教養の高い人で、家族の他の人たちも同様である。そしてこの事が彼女の陳述の重要性を固めるのである。彼女の説明によれば、トランカスで発生した事件の経緯は次のとおりである。

一九六三年十月二十一日の午後七時、同家の地所であるサンタテレサ地所の私有発電所で故障があった。この発電所は同家の電気の供給源としてきわめて重要であった。というのは同家の敷地はアルジェンティン、トゥクマン州はトランカスなる田舎町から二マイルの、半径一・五マイルの無人地帯に位置するからである。そこでモレノ家は懐中電燈とローソクを使用しなくてはならなくなった。目撃者のヨリエは、この停電による障害があとで起こる現象と関係があるかどうかはよくわからないと言う。

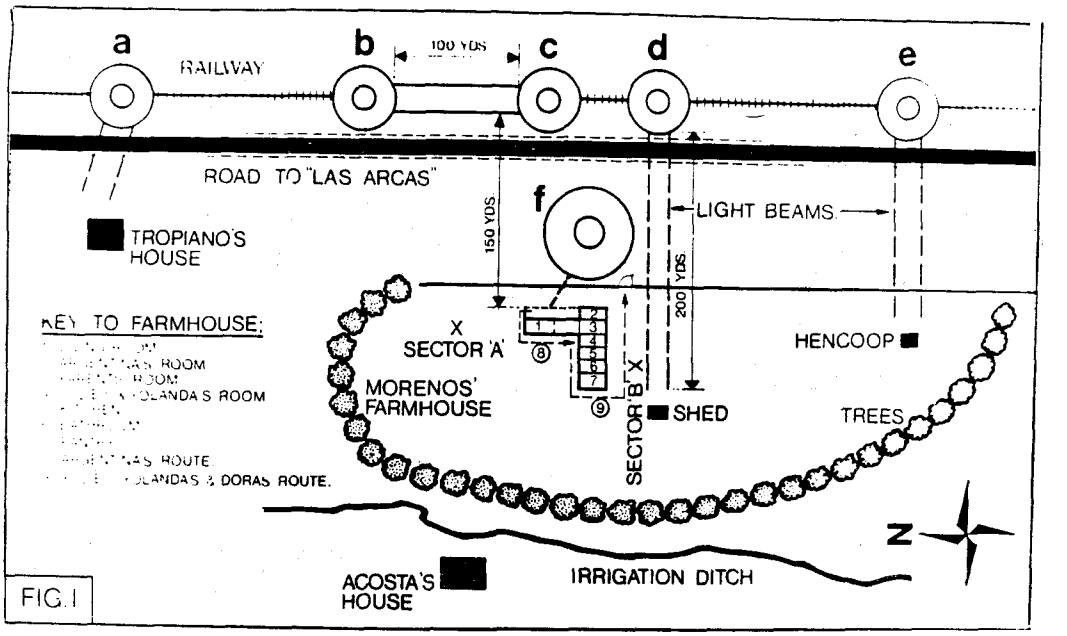
夕食をとった後、停電のために家族は八時頃には寝なければならなかった。しかしその頃すでに結婚していたヨリエは起きている必要があった。なぜなら九時半に長男の赤ん坊に食物を与えてやらねばならないからである。彼女は赤ん坊と姉のヨランダ（三十才で未婚）と共に四号室にいた。（次頁の図1を参照）

その時、女中のドラ・マルティーナ・グスマン（十五才）が室のドアーをノックして「恐ろしい」と言う。しかしヨリエは相手の恐怖の原因がわからないために、さほど重要な事とは思わず、同家が位置する場所の淋しさのせいだろうくらいに考えたが、田舎娘としてこの女中は当然このような体験には慣れきっているはずだとみて、「全く変じゃないの」と相手に言った。

そのあとまもなくしてドラ・マルティーナはまたやって来て、裏庭に原因不明の光る物が見えるとしきりに言う。説明によると、家の外へ出るたびにあたり一帯が突然数秒間照らされるというのだ。雷雨発生の形跡はなく、ただ二、三片の雲が空中に浮かんでいるだけである。

ヨリエとヨランダは起き上がって裏庭へ出た。何も見えない。数分間そこにいたが、やがて四号室へ引き返した。しかし帰るや否やドラ・マルティーナが呼びかけて、また光（複数）が現われたという。そこで再び姉妹は外へ出たが、別に奇妙な物は見えない。しかしドラはすっかり恐れおののいていた。ドラは二人にしばらくのあいだ外にいてくれという。光（複数）が一定の間隔をおいてくり返し現われるようだというのだ。彼女はあまりに恐れたので、すまさねばならぬ雑用一切は翌日にまわすと言いだした。

そこで三人は中庭の左端（図1のセクターA）まで歩いて行った。そ



してそこで一同は家から百五十ヤード離れたベルグラーノ鉄道の線路の方向に、約百ヤードの長さの管状の輝く細長い物体で連結された二個の光体が存在するのを見たのである。（図1の物体bとc）何人かの人影（約四十名）が見えて、光る背景の中に輪郭が浮かび上がっている。人間たちは行ったり来たりしているので、目撃者たちはたぶん脱線事故かサボタージュのたぐいかと思った。それらは明らかに人間であって、普通の身長ほどの人影群は両端の方向へ行き来しているように見えたが、ヨリエは管状物の内部で動いていたと考えている（十一頁の図2を参照）。

周囲の植物に妨げられてよく見えないので、木の枝の下から見ようとしてひざまずかねばならなかった。

よく調べるためにもっと線路へ近寄ろうということになった。二人のモレノ姉妹は充分に着込むためにひとまず部屋へ引き返した。大変寒い夜だったからである。一方ヨランダは懐中電燈を探しに行き、ドラは拳銃のコルト三八を取りに行った。これは彼女が家に一人でいる時のために護身用として所持しているものである。ヨリエは三号室を抜き足で通りすぎた。ここには両親（アントニオ・モレノ・エバイチ、七十二才と、テレサ・カイルス・デ・モレノ、六三才）が眠っていた。そして二号室へ行った。この室には別な姉のアルヘンティーナ・モレノ・デ・チャベス（二十八才で、陸軍軍人と結婚している）とその二人の子供が眠っている。ここへ来た目的は、ヨリエが外へ出たあいだに自分の子供を見てくれるようにアルヘンティーナに頼むことにあった。ヨリエの頼みを聞いたアルヘンティーナは、妹が屋外へ出るのを思いとどまらせようとした。外に見えた例の人影の群れは、もし妹を見つけたら発砲しかねないゲリラかサボタージュの労働者かもしれないというのだ。しかしヨリエは何も起こりはしないだろうと言い張った。

この時アルヘンティーナも好奇心にかられて隣接の廊下へ出て行った。彼女は二人の妹と女中が見たという光体を見ようとして廊下の端の方へ歩いて行った。すると「窓の近くに沢山の不思議な物体がある」と驚いて金切声をあげた。恐怖したアルヘンティーナは気が転倒し、家の裏側の方へむかって狂気のように走りまわった（図1の点線）。狂乱状態のまま彼女は庭に積んであったレンガの山に走り込んで地面に倒れたが、すぐに立ち上がって四号室に走り込んだ。彼女の様子が変化したために——ふだんはおとなしい内気な性格の人である——他の姉妹は驚いた。そんなに狼狽したのを見たことがないからだ。彼女は泣いていた。そしてあえぎながら、実際に見えたのは飛行体だったとみんなに話した。

この騒ぎのためにモレノ家の両親が眼を覚ましたが、子供たちは寝ていた。ヨリエ、ヨランダ、女中の三人は急いで四号室を通過して出て行って、家の右手方向へむかった（図1の点線を参照）。

ドラ・マルティーナが先頭に立って三人は線路の方へ断固たる態度で歩いて行った。まず最初に注意を引いたのは同家の正門付近のかすかな緑色の光である。一同は、これは同家の使用人であるウアンカ氏の運転する小型トラックのライトにちがいないと思った。そこでドラは前方へ走って門を開いてトラックを中へ入れようとした。ところが、まさに走り出そうとした時、ヨリエが懐中電燈で緑色の光体を照らしたのである。突然六個の小窓が明るくなって、わずか十四フィートむこうの空中に浮かんでいる不思議な円盤型物体がはっきりと見えてきた（図1の物体f）。

それは直径二十八ないし三十フィートの固型物体で、表面はアルミニウムに似た金属らしかった。多くの接合部分があって、リベットのように見える突起部（複数）もある。頂上には金属らしきドームがあるが、黒くて、リベットはない（図3）。

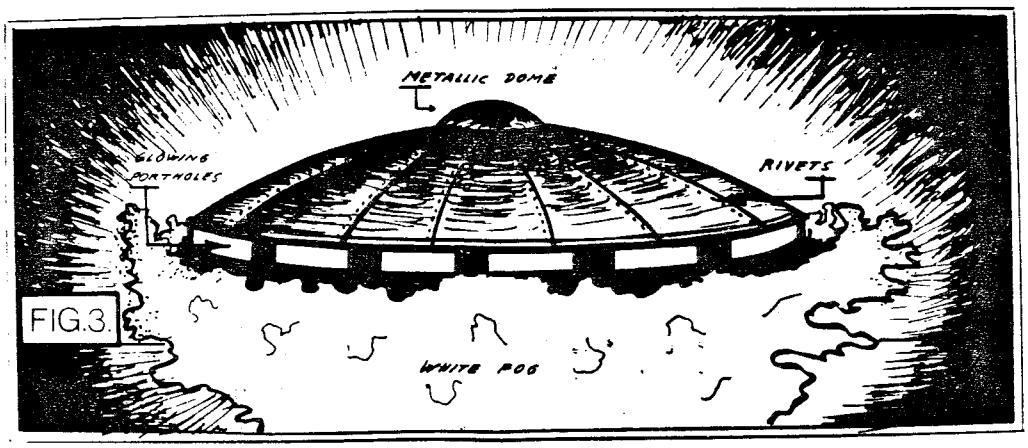


FIG.3.

物体の表面にはマーク類はなかった。小窓は三十五インチ×二十五インチの長方形で、強力な白色光を放っている。機体表面の他の部分は見えなかったが、これは白っぽいモヤが下部から出ていたためである。ドームから窓の下部までの距離は約八ないし十フィートで、窓の下部から地面までは五フィートにすぎない。機体は静かに前後にゆらめいていたが、中心を軸として回転しているのではなかった。地面に着いていないことがはっきりわかった。

ただちに一種の色帯が機体内部で明るくなって回転を始めた。これは窓を通して内部が見えたからである。窓々は今やゆっくりと順次に色を変化させていて、そのためにまるで窓群が周囲を左回りで回転しているように見えた。最初このような運動の印象は一つの窓から他の窓へ通過する赤色光によって与えられた。しかし次第にこの運動はスピードを上げて、ついに周囲全体がオレンジ調を呈してきた。柔らかいブーンという音が光の運動に付随する。すると白っぽいモヤが濃厚になり始めて、硫黄のニオイに似た鼻を突き刺すような悪臭を放った。

三人の目撃者はこうした詳細を三十秒以内で見とどけた。突然、物体から赤い炎が放射されて——どの部分から出てくるのかは不明だが——一同は我に返った。炎がみんなを激しく地面にたたきつけて、からだに襲いかかり、一同を地上六フィートも転がしたからである。みんなは起き上がって恐れおののきながら廊下の方へ走った。女中のドラ・マルティーナは先頭にいたために炎の影響を最も強く受けた。姉妹の二人は強烈な熱のショックを感じただけである。（翌日ドラは顔、腕、足の大火傷のためにトランカス病院で治療を受けた。ヨリエは病院にこの記録が残っていると考えている）

これと同時に、線路上で三個のもっと明るい光体が輝いて（図1の物体a、d、e）、この不思議な物体群は合計六個となった。最も離れている二個の物体（aとe）間の距離は約四百ヤードである。（家の後部からドラ・マルティーナによって目撃された例の正体不明の光（複数）は、一斉についたり消えたりするこれらの光だったと思われる。庭の中心から線路の築堤を肉眼で見ることは事実上不可能であるが、物体群の光が庭全体を照らすことはもちろん可能である。

凝集した光線

飛行体内部の光帯が次第に速く回転するにつれて、物体〝f〟は次第にその下部から放射されるモヤの中に包まれ始めた。そして物体の構造上の特徴はついに見えなくなって、そのあとは一片のオレンジ色の雲が残っただけであった。

東の方に面している二号室の窓から、モレノ家の両親は物体〝f〟の上部から幅十フィートの〝光の管〟が出るのを見ることができた。それは非常な正確さをもって同家の各所を探索していた。まるで精密な調査をしているようだ。

線路上に着陸したり上に浮かんだりしている他の物体群は、物体〝f〟と同じ金属的な外観を呈していたが、〝f〟がかなり大きいように見えた。（ヨリエ・モレノはそれを「ラ・ナーヴェ・マドレ〈母船〉」と呼んでいる。サイズの点ばかりでなく、他の五個の物体の行動を指揮しているようにも見えたからだ）あたり一帯は非常に強く照らされたので、

細部を観察するのは比較的簡単だった。

二本の凝集光線が物体から出始めるのをヨリエが見た時、彼女は四号室の入口を通って再び外へ出て、家の最右端の方へ歩いて行った（図1のセクターB）。その光線は家から四十ヤード離れた小屋にまっすぐに向けられた。この中には一台のトラクターが入れてある（図1の第八）。線路と小屋との間の二百ヤードの距離を光線がずっと伸びて行くには数分を要した。そして光線はついに小屋の手前約六、七フィートの所で停止したのである。幅十フィートの光線が空間を伸びて行くのは恐ろしい光景だった。光線全体にわたって全然地面に触れた個所はなく、地上三、四フィートの空間にあった。この光線は完全な円筒形で、どこにも影はない。（しかし物体自体の直径から見て、その管状光線の光源のポイントは最先端よりも小であったと思われる）。

光線は蒸気や音を発しなかった（当時の新聞は「発した」と誤報している）。光線はトラクター小屋の手前で約四十分間とどまっていた（翌日モレノ家は、トラクターの各部分についていた油の跡が、まるでトラクターがていねいに洗われたかのように消えているのを発見した）。

本能的にヨリエは右の前腕の半分を、物体から放射されている管状光線の一つに横から突っ込んでみた。彼女が最初に思ったのは、この光線は何か未知の装置によって放射される集中的な水の噴流ではないかということだった。光線の水晶のような透明さがそう思わせたのである。しかし前腕は濡れなかった。ただ強烈な熱を感じただけだが、皮膚に影響はなかった。何か非物質的な物だった。彼女がそのような事をしても管状光線に変化は起こらなかった（光線が小屋までとどいたとして、それが垣を貫いたとしても、やはり害を与えないことは明白である）。

未知の物を目前にした恐怖でヨリエは屋内へ逃げ込んだ。父親の老モレノ氏は自ら出かけて光線の原因を調べようとしたが、娘が押しとめた。妻のテレサは祈っていた。二、三、四号室から一同は他の物体群からも輝く光線がゆっくりと同家の方へ伸びて来るのを見た。光線は白色で、形状は完全な円筒形である。光は散ることはなく、十フィート幅のパイプに似て、各物体から二本ずつ平行して伸びていたが、物体〃f〃だけは光線が一本しかなかった。光線の先端はとぎれている。（物体〃b〃と〃c〃を連結した例の管状物はすでに消滅していて、人影群もなかった。そして両物体は凝集された光線を家の方に向けていた）

物体〃e〃からも凝集光線が放射されるのを一同は見た。その光線はトラクター小屋の南側にあるニワトリ四十羽収容の鶏舎の方へ動いていた。（図1の第九）そしてその先端は鶏舎からすぐ手前の位置でぴたりと止まっていて、長くそのままであった。

一方、家の内部は温度が四〇C以上に上昇し、その温度の上下を動揺していた。これらの異常現象が発生する前は、屋内の温度は十六Cを保っているにすぎなかったのである。まだ眠っていた子供たちのベッド着は汗で濡れていた。

屋内はまるで白昼のように明るく照らされていた。どこから光が入って来たのかは、ヨリエは説明できない。光線が壁を貫通したのかどうかは目撃者のだれにもわからなかったが、ヨリエによればこの光線が内部の照明の原因であったことに間違いはないという。もっとも彼女は断言するのを控えた。（しかしこの光線がヨリエの前腕や垣を難なく貫いた事実は、これが正しい説明かもしれないという有力な証拠になる）

集束磁場に関するフランス人ジャン・グピルの仮説によれば、これらの〃パイプ状光線〃は磁場のトロイド（円すい曲線回転面）状放射ではないかという。木または石は磁場にとって障害にならない。グピルの説

によれば、トロイド状に放射されるあの輝く光線は、壁の反対側で再構成されて、固型物を貫通する光となって驚くべき状態を呈するのだという。そこで、少なからぬ量のエネルギーの放射を考慮に入れれば、屋内の温度は当然上昇するだろう。

これらの現象が発生している最中の或る時に、セニョーラ・テレサ・デ・モレノは三号室の窓をシルエットとなって素早く横切った一つの影を見た。しかし本人はこの影が自分の心の産物なのか、それともほんとうの人影だったのかはわからない。

その後まもなくして物体〝f〟はその光線を南方のトランカスの町の方向へ向けた。それはゆっくりと伸びていって、十ないし十五分後には町の郊外に達した。それから上方に伸びて一八〇度のターンを行なってから北側へ向いた。次にゆっくりと縮んで、ついに物体〝f〟の中へ引込んでしまった。するとその物体は線路の方へ移動し始めた。その場所で他の物体群と一緒になり、全部が東方へ低く飛び立った。メディーナ山脈の方向である。最初に目撃された時から四十ないし四十五分間が経過していた。その後三十分以上もの間、地平線はオレンジ色に染められていた。

（注＝このあとまだ詳細な説明や推測等が続くが、紙面の都合により省略する。このUFO群は硫黄に似た臭気や炎や煙等の、きわめて原始的な〝公害〟物を放つけれども、必ずしもホスタイル（敵対的）ではなかった。ドラ・マルティーナが大ヤケドしたのは物体に接近しすぎていたためである）

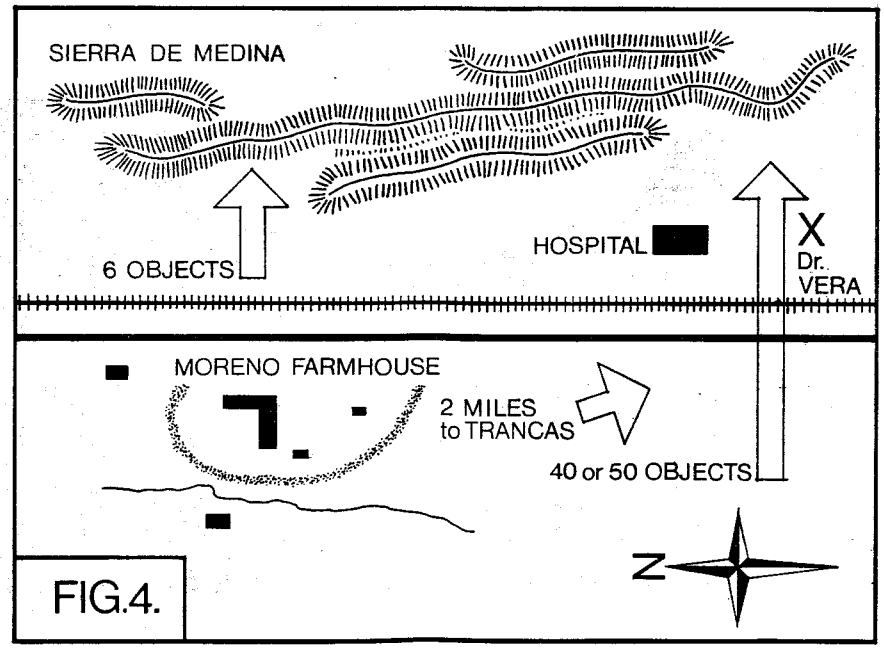


FIG.4.

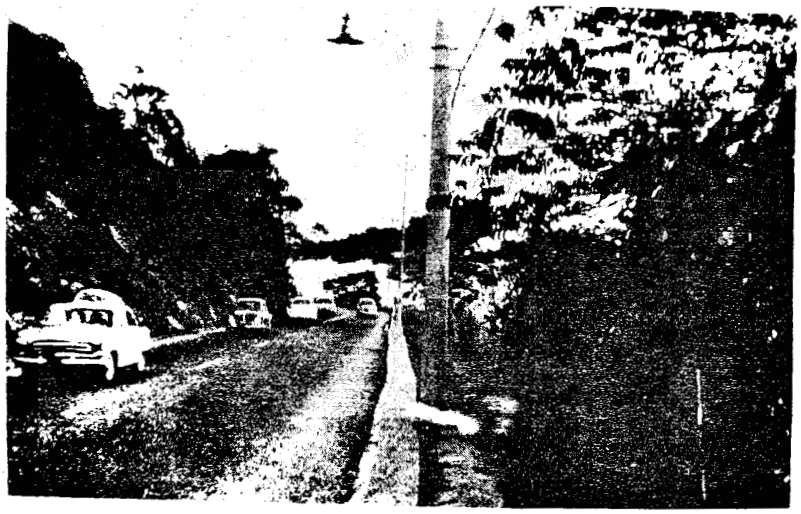
リオデジャネーロ付近に出現した円盤

ウォルター・ビューラー

一九七〇年六月二十七日の白昼十一時四十分に発生したこの事件は注目に価する。というわけは少なくとも八人の目撃者によって確実に観察されたことと、UFOが人口の密集した都会地へかつてないほどに接近しつつあることを明確に物語っているからである。一機の大きな金属的な円盤が南大西洋の海面に着水した。場所は海岸の絶壁をけずり取った有名な海岸道路であるニエミエール・ハイウェーから五百メートルばかりの沖合である。このハイウェーはレブロンのリオデジャネーロ寄り郊外から南西の方向に伸びているもので、この道路から美しい海面の風景をながめることができる。

この円盤は三十分間水面に着水しており、その内部には二人の乗員がいた。二人は宇宙飛行士の宇宙服に似たヘルメットと白っぽく輝くアルミニウム色の衣服を着ていた。円盤が離水した時、そのあとの海面に一種の浮き輪のような物を残したが、どうやら円盤着水時にフロートの役目を果たす物らしい。

ニエミエール・ハイウェー．この道路の左上にマチャド家がある．



ニエミエール・ハイウェーは問題の位置の海面から三十ないし四十メートルの高さの所にある。そして証人たちが目撃した問題の家はこの道路の少し上のあたりに位置している。その日は日曜日で、晴天下を一時間約千八百台の自動車が――と我々は見積ったが――通過していた。事

件のあった日の早朝、私は（ビューラーは）自分でその地区へ行っていた。午前七時に空はまだ曇っていた。（南半球では六月は一年の内で日光の少ない月であることを考えられたい）

私がインタビューしたおとなの目撃者三人はアリステウ・マチャド氏とその奥さんのマリア・ナザレ・マチャドで（ハイウェーの三一八号に住む）、それに隣家のジョアン・アギアール氏である。アギアール氏はブラジル連邦警察の警官で、同じハイウェーの二一〇号に住んでいる。四人目のおとなの目撃者はマチャド家の長女で二十三才のクレウザである。あとの四人の目撃者はマチャド家の次女以下の娘たちで、十四才のコンスエロ、十才のローゼマリー、八才のマルガリーダ、五才のカティーアである。（私は五人の娘たちには会わないで、その両親とジョアン・アギアール氏に会見しただけである）。この事件について即刻私に通報してくれたのはリオの新聞ディアリオ・デ・ノティシアス紙のカルロス・ネット博士であり、その結果私は彼と同行して現場へ行き、同日午後四時にこれらの目撃者と話すことができたのである。

円盤の出現

マチャド家の説明は次のとおりである。

マリア・ナザレ・マチャドは台所にいて昼食を準備していた。時々彼女はベランダへ出て行った。そこでは家族一同がアギアール氏と一緒にパーティー・ゲームを楽しんでいたのである。一度彼女は時刻を尋ねた。十一時三十八分であった。それから約二分後にアギアール氏がふと海上を見て急に一同に呼びかけた。水しぶきを上げる一そうのモーターボートだと彼が思った物が見えたからである。この物体が着水した時に周囲へ水煙を上げたのだ。

ただちに一同はゲームをやめて、どうしたらよいか、モーターボートが援助を求めているのかどうかなどについて熱心な議論を始めた。というのは物体の内部に〝水浴者〟が二人いて、腕を振って合図をしているように見えたからである。アギアール氏は物体内に二人の人間がいて、輝く衣服と頭部に何かを着用していたと確信する。やや厚目の上下続き服で、全くの小人のように見えたという。

二人の人間は物体のデッキ上で働いているようであった。物体は白っぽい金属性の色をしており、長さは四メートルから六メートルの間であるらしかった。上部には透明なドームがついている。（図1）

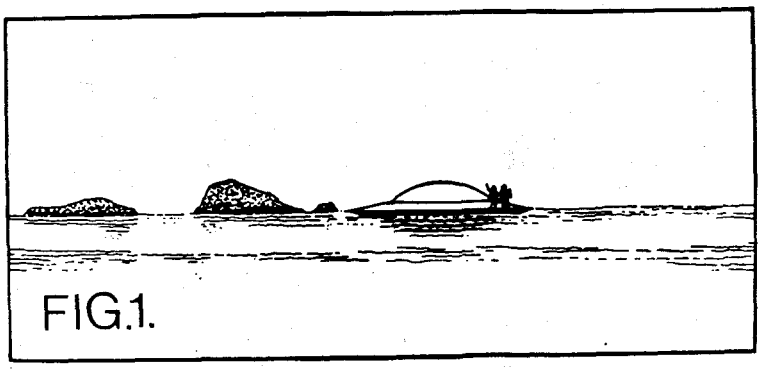


FIG.1.

アギアール氏が救助関係機関へ電話をかけるために付近のマール・ホテルへ走ることになり、一方あとの人々は物体を子細に観察し続けた。それは海の水が黒く見える部分と明るく見える部分との境目あたりの、海水が常にどす黒く見える所に来ていた。

ディアリオ・デ・ノティシアス紙の記事（一九七〇年六月二十八日付）によれば、円盤が着水していた個所は海岸から約五百メートルの位置というが、その後の調査では七百または千メートルあったことも考えられている。いずれにしても海岸に驚くほど近い！

私のその後の調査によって、円盤は一時海岸から百メートルばかりの位置まで接近したことがわかった。音を全然発することなく、船のように揺れ動くこともしない。

円盤の離水

アギアール氏がマール（海洋）ホテルへ往復するに要した時間は二十五ないし三十五分位である。このホテルはレブロンの方向一キロメートルの所にある。彼がマチャド家へ帰った時、円盤はまだ海上にいた。それで彼も円盤離水時の目撃者の一人となったのである。だから円盤が海上に着水していた時間は約四十分だったと言える。

アギアール氏の説明によると、円盤が離水した時、それは垂直に上昇したのではなく、水面上約三百メートルをモーターボートのようにしぶきを上げて滑走したのだという。したがって物体が空中へ浮かび上がって低い弧をえがいて南東の方向へ飛んで行った時に、目撃者たちはそれが普通の船ではなくて空飛ぶ円盤だったということに気づいたのである。（図2）

マリア・ナザレはすぐれた観察者であることを示した。というのは円盤が離水した時彼女はその下部にカランボラという名で知られているブラジルの果実のように見える六角形の物体があるのに気づいたからだ。（図3）

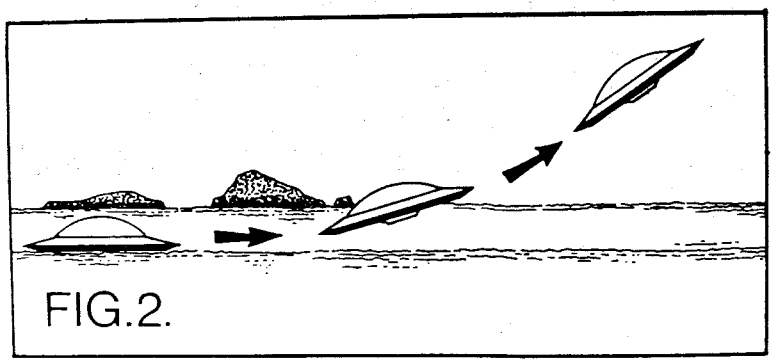


FIG.2.

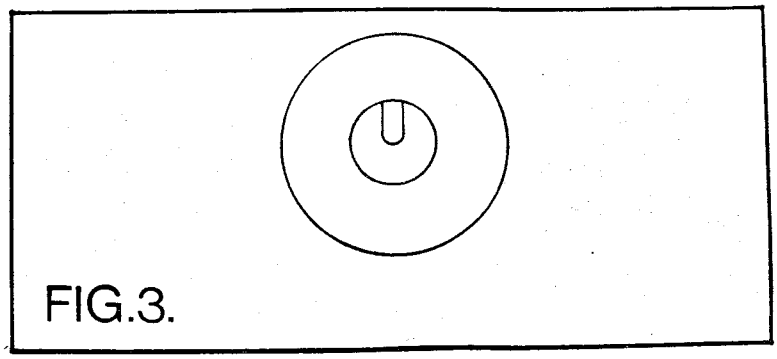


FIG.3.

この小付属物は機体の中に引込んだように思われた。しかもこのカランボラ状物体の表面には多くの色光があって、緑、薄黄、赤等の光が順次にきらめいていた。（他の人の報告によると、一個の回転する光体がこのような色光を放ったのではないかという）

再び乗員が見えた

すでに述べたように円盤が海上に着水している時はアルミニウム製のように見えたが、ひとたび空中に飛び上がると透明になった。この時マリア・ナザレは機体内部に二人の乗員がすわっているのをはっきり見ることができた。

その頃ハイウェーには車の交通が少なくて、そのため騒音はひどくなかった。それにもかかわらず先に述べたように目撃者のだれも円盤から発せられると思われる音響を聞かなかった。飛び上がった物体は急速に視界から消えて行った。

輪が現われた

円盤が着水していた個所の海面にトランクまたはヒツ位の大きさの輪の形をした白い物があったが、しばらくしてこの輪は沈んでしまった。するとまた現われて、その物体から黄色のタマゴ型物体が分離して出て来た。その径は最も長い部分で約四十センチメートルで、水面から約二十センチほど突き出て浮かんでいた。

約三分間このタマゴ型の黄色の物体は静止した後、海岸の方へゆっくり移動し始めた。長軸を目撃者の家の方へ向けている。この物体の他端には緑色のフランジがあって、あとで黄色のメインボディーから分離して、約八十センチの距離を保ちながらうしろからついて来た。

マリア・ナザレの推測によると約十五分間経過後に、この黄色物体は海岸から約百二十メートルの距離の所まで来た。それから左方へ直角ターンをしてガベアの海岸の方へ頭を向けたが、なおも岸辺と大体に同間隔を保っていた。この西方移動は当時の海流の方向とは逆であった。

そこでマリア・ナザレは家の前の路上に出て黄色い物体の動きをなおも観察しようとした。その時たまたま数名の少年が路上をやって来たので、物体の方を指して呼びかけた。少年たちは石を投げたけれどもあたらなかった。この物体はその後約十分ばかり見えていたが、みんなが立っていた場所から五百メートルばかりの所の岩の岬にかくれて視界から消えてしまった。

一方、白い輪は数度見えなくなったあと再び浮かんでいて、黄色の物体と再会しようとするかのように、ゆっくりとガヴェア海岸の方へ接近しつつあった。みんなは計二十分間この白い輪が見えかくれするのを注視していたが、これもやがて視界から去っていった。

（注＝まだ詳細な描写と推測が続くけれども、頁数の都合がつかぬため残念ながらこの辺で）

トピックス

銀河系外にも生命

七月十四日発行の米国天体物理学雑誌であるアストロフィジカル・ジャーナルで、カリフォルニア工科大学のL・M・ウェリアシェウ博士（三四才）は「一千万光年近い距離の他の銀河系に水素酸分子（OH基）を発見した」という報告書を掲載して注目をあびている。これによると銀河系外に生命が存在するかもしれないという。

水酸基分子は地球上の生物の組織を形成する化学物質の一つで、これが自然界で形成されることは地球的生物の存在にとって必要な条件とされている。我々の銀河系は直径約十万光年で、この中の星間ガス中にある水酸基は八年前に発見され、太陽系以外にも生物が存在する可能性が認められるようになってきた。したがって一千万光年離れた他の銀河系にも地球の生物に似た生命体が存在することを科学的に明確化したことになる。

地球以外にも生命源が？

九月十七日に米航空宇宙局が明らかにしたところによると、カリフォルニア州マウンテンビューの航空宇宙局エームズ研究センターの研究グループは、最近開催された化学協会年次大会で、地球以外の場所で発生したと思われる化学分子を発見した事実を公表した。これによって宇宙空間に未知の生命が存在する可能性が示された。

この化学分子は一八六四年にフランスに落ちた〝オルギーユ〟イン石から発見されたもので、アミノ酸分子六個とピリミディン塩基分子八個が含まれている。科学者たちはこの二種類の分子が遠い宇宙空間で発生したと考えている。大気圏外から来た生命に関係ある化学分子の発見は同グループにとってこれが三度目である。これらの化学分子は火星の軌道の外側にある小惑星群から発生したとみられている。

ピリミディン塩基分子は生命源ともいえるDNA生体内の核酸を構成する主要物質の一つである。

紀南上空のUFOの大群

八月十三日の夜、和歌山県新宮市の熊野速玉大社宮司の上野元司氏（五三才）が同市磐盾町の親類である田中洋氏（五二才）宅を訪問した際、南東の空に他数の飛行物体群を目撃した。星のように光る大小二百個の物体が長方形にならんで、その後方に見かけ上野球のボール大の光る物体があり、約三分間黄白色に輝いて左に旋回していたという。

上野宮司は一緒に見た田中氏の記憶等も参考にして、この円盤群を色紙にスケッチしているが、三重県紀宝町にも同時刻頃に目撃者が四人いたことが判明したため、上野宮司と田中氏の目撃は幻覚でなかったことが立証されて、「紀南に出現したUFOの大群」として話題となっている。

上野氏のスケッチによるUFO群

宮内温夫君の栄誉

日本GAP幹部で商業美術家の宮内温夫君は同じくGAPの古山晴久君と共に昨春カナダへ渡ったが、最近宮内君から編者宛にとどいた連絡によると、同君は八月にニューヨークの世界最高のアートスタジオであるプッシュピン・スタジオへ入所したということであった。日本人としてここへ入所したのは同君が最初であり、日本商業美術界のために万丈の気をはいた同君の栄誉を讃えたい。以下は同君の手紙の一部である。

「七月にピーター・マックスが彼のスタジオで働かないかといってくれ、スタッフの連中に紹介してくれたのですが、いわれた日に行くと、ビジネスがスローだったのでもう少し待ってくれといわれ、思い切ってプッシュピン・スタジオに行ってみました。幸いミルトン・グレイサー（注＝グラフィックデザイナーとして世界的）がすぐ会ってくれ、久保田先生も御存知かと思いますが、デザイン、イラストの世界では世界一で、おしもおされぬスタジオです。―中略――デザインセンターの友達その他に知らせてもみんな信じられないようで、ボク自身いまだに本当にラッキーだったという以外ありません。来年の五月に東京でプッシュピンの展覧会をやるので、その時うまく先生方と一緒に帰れればと思っています。前週の木曜日にニューヨークでアートディレクターをしている柏木さんに宇宙やその他の話をしました。彼女もアメリカの学校を出て、十年近く、〝意識〟その他アダムスキーではないけど他からの知識あり、（高級なヒッピーという感じ）かなり深く話しました。ところが三日後に彼女の弟さんが、日曜日の九時五十分、マンハッタンのクライスラービルの上を非常な低空でゆっくりうごく円盤を実にはっきり見たそうです。木曜日に彼もはじめて円盤の話をボクから聞いて半信半疑だったのですが。その円盤はまわりに光るものがぐるぐるまわり、高度五百ないし千メートル、直径五十ないし百メートル。ふちに数百個の電球がついたように光って回転したそうです」

新訳 空飛ぶ円盤実見記(4)

ジョージ・アダムスキー

第 3 章

12月13日における再来

私のネガホルダーを返してくれるという訪問者（金星人）の約束のため私は今や自分を絶えず警戒の状態に保っていた。私はパロマーガーデンズの地所の一角に望遠鏡をすえた。そこからなら邪魔物なしに遠距離を見通すことができるし、広漠たる海原も展開する。これこそはパロマー山の斜面のこのような台地から得られる眺望なのである。

一九五二年十二月十三日の朝、私は頭上で轟音を発するジェット機群によって付近に何か起こったのではないかという気がした。すると遠方に閃光が見えたがすぐに消えてしまった。「あそこに何かいるのではないか。砂漠で見た円盤が私のホルダーを返しに来たのかもしれないぞ」と、そばにいた人たちに話した。

ジェット機群が追い払ったのか、それとも円盤はジェット機群が去ってしまうまで待っていて、またやって来るのだろうかと思ったりした。

九時頃、私は再び空中に閃光を見たので、その方向へ望遠鏡を向けようとした。今や空中にはジェット機の機影はない。それで私は、先ほど見た円盤が安全にやって来ることができればよいがと思った。それが彼らの計画ならば——。

間違いはなかった。凝視していると、それがこちらの方向へ音もなく滑空して来るのを見ることができた——朝の日光の中に機体からさん然たる色光を放つ虹色のガラスのような飛行体である！ うっとりとして私は見つめていた。腹の中がからっぽになったようになり、ぞくぞくするような期待感が背筋を上下に走った。ついにやって来た！ あたかもこの飛行体のパイロットが私がそこにいて待っていたのを知っているかのようだ！ たぶん彼はここに着陸するだろう。たぶん・・・・・。

だが期待は早すぎた。付近の谷の上空、私から約二千ないし三千フィート、谷の上空約三百ないし五百フィートの所へ来た時、それはとまって静

止するように思われた。この時私は立派な写真を撮ろうとして、最大限の意志力をもって興奮を抑制した。す早く私は二枚の写真を撮った。続いて、円盤がそのような近くにいたのでは大きすぎて、その位置にあるカメラでは円盤全体が写真に入らないことに気づいた私は、円盤が停止しているあいだに接眼鏡に取り付けてあるカメラを（左右に）回転させて更に一枚撮った。円盤が再び動き始めた瞬間に四枚目を撮影した。

後日写真を仕上げた時、これらの写真の内、最初から三枚は鮮明に写っていることがわかったが、動いている時に撮った四枚目はボケていた。それでもよく写っている。

接眼鏡に付けたカメラの位置を変えているあいだに私は心中で計算をして、すでにわかっている距離と比較してこの円盤の大きさを注意深く計ってみた。以前に砂漠で見た時私は円盤を直径二十フィートと目測したのだが、ここでは直径約三十五ないし三十六フィートあることがわかった。

（アダムスキー注＝デザートセンターに来たあの円盤と外観が同じの〝スカウトシップ〟の小編隊が、一九五三年二月九日にバージニア州フランクリン市の上空で見られた。それらは直径三十五ないし三十八フィートと報告され、時折赤い輝きを放つ銀色の物体であった。キャビンには丸窓（複数）があって青色光を放っていた。その編隊はジェット機群によって追跡されたが、ジェット機群は取り残されてしまい、何もない空中を追いかけるだけだった）

私が判断し得る限りでは機体の高さは十五から二十フィートのあいだであった。

さて円盤が私から百フィート以内と思われるあたりへ接近して来た時、機体の一方の側に丸窓の一つがわずかに開いて、一本の手が出てから、十一月二十日に宇宙人の友が持ち去ったのと全く同じホルダー（注＝写真用乾板またはシートフィルムを入れる金属性のプレート）が地上に落とされた。ホルダーが投げられた時、手がかすかに振られたように見えた。機体が頭上を通り過ぎる直前である。

私はホルダーが落ちて地面に達した時にそれが石にぶつかるのを見た。その方へ歩み寄って拾い上げた時、石にぶつかった角の部分が少しへこんでいるのに気づいた。ポケットから取り出したハンカチを使ってそれを注意深く拾い上げながら、内部に何か入っていたり外部に指紋がついていたりした場合にそれをきずつけてはいけないと思ってハンカチに包んだ。

そのプレートによって、その円盤は砂漠で見たのと同じ円盤であることが証明されたし、振られた手によって、ホルダーを落とした人は私が（砂漠で）会った人であることが示されたわけである。

私の得意満面ぶりを想像していただきたい。またも私は意識が高揚して『同時に二つの世界にいる』という感じを起こさせられたのである。

頭上を通過した円盤は北方の山々のふもとの方へ向かって移動しながら台地の小さな谷を飛び越えた。木々のこずえの下へ降下した円盤は台地の上方にある井戸と一軒の小屋をすれすれに飛んだので、私があらかじめ注意を与えておいた人々によってその場所で目撃され写真に撮られた。

どの方向に円盤が飛んで行くかを見ようとしてその小さな谷を私が横切るには数秒かかっただけである。もしまだ円盤が見えるとすれば——。それはすでにこの台地を通過していた。だがはるか彼方にこずえの下を低く、そして前方の山々のふもとに近く、東方にむかって急速に飛んで行く円盤をはっきりと見ることができたが、やがて朝の青いモヤの中に

消えて行った。

大気圏外から来た私の友が再度の訪問をしてくれたのだという実感に狂喜した私の今の唯一の考えは、うまくキャッチした物体の写真を見るために写真屋へ行くことにあった。そこで、その日は土曜日で普通ならばわれわれにとっては忙しい日であったにもかかわらず、私はフィルムを現像してもらうために四十マイル離れたカールズバッドへつれて行ってくれと頼んだのである。だが私は落とされたホルダーは持って行かず、ひそかにしまい込んだ。それをどのように処置するかをはっきりきめるまでは、しまっておこうと思ったのである。

撮影済のフィルムに関する私の激しい好奇心はその日は満足させられないことになった。写真屋が不在なのだ。しかも数時間は帰って来ないという！ だがその夜写真を仕上げて何か興味あるものが写っていたら翌日とどけるからと奥さんが約束してくれた。

約束どおり写真屋のD・J・デトワイラー氏夫妻が、私が撮影に成功した写真を見せるために日曜日の正午頃やって来た。写真の全部が全くすばらしい出来栄えで、如何なる円盤写真にも見られないほどに細部が鮮明に写っていた。

数日間私は例のホルダーを拾い上げたままの状態にしておいた。その仕上げを新聞社へ依頼するか、それともデトワイラー氏にやってもらうかで思案していた。また、ホルダーに指紋があるとすれば、それを採取してもらうかどうかもはっきりきめようと思っていたが、ついに指紋を残さないことにした。指紋は写真と同じほどに個人識別の役割を果たすかもしれないからだ。しかも金星人は自分の写真を撮られることを望まなかったのだから、指紋を採取することによって本人を裏切るようなことはしたくなかったのである。

このように決意したあと、拾い上げた時に包んだままの状態になっているホルダーをかかりつけの写真屋へ持って行った。私も写真屋もホルダー中に何かが入っているのかどうかはわからなかったが、安全を期して暗室中で開くことにしようと相手が言った。そして何かが入っていたら普通の仕上げ法で処理するという。相手の言う理由は次のとおりである。もし内部のフィルムがすでに現像済であったとすればこの暗室中の処理によってフィルムがだめになることはないが、未現像ならばこのように暗室内処理によって保護されるのだという。

仕上げが行なわれた時、しかも証人たちが居合わせるなかをプリントが作られた時、元の写真――それは宇宙からの訪問者がホルダーを持って行く前に私が撮影したものだが――が洗い流された形跡があって、そのかわりに奇妙な写真と符号によるメッセージが写っていた。今日まで（注＝一九五三年頃にこの原稿が書かれた時点までという意味で、一九七一年までという意味ではない）これは解読されていない。数名の科学者が解読作業にあたっている。彼らは足跡の記号類の解読にも従事している。これらのメッセージのいずれもが満足すべき程度まで解読されたとみんなが感じるようになるまでには、かなりの時間がかかるかもしれない。

私の要請にもとずいて二種類の政府機関の派遣員が会いにやって来た。この人たちは発生した出来事すべてに関する私の詳細な説明を熱心に聞いたが、驚きを示さなかったし、話の真実性について何の疑惑も表明しなかった。彼らは質問さえしないのだ。この人たちは高度に知的な人で、きわめて平静であった。報告される物事に対して反応を示さないことが彼らの仕事の基本的条件なのかもしれない。しかし相手の態度に対する

私の反応は、彼らにとって珍しくない種類の出来事の新たな報告を私が行なっていることを相手が認めたのだな、ということであった。

彼らは私が与えた円盤の写真を二枚と円盤から落とされたネガから焼きつけたプリント一枚とを持って帰った。

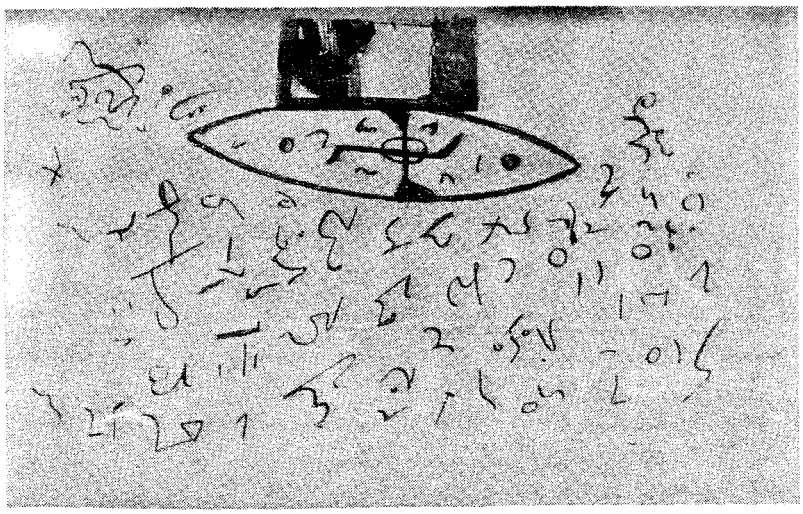
さて、この地上で六十二年にわたる私の生涯において真の最大の体験となった事件の、真面目にしてかつ真剣な物語を終えるにあたって、この物語は多くの読者、特に円盤問題に真面目な関心を殆ど払わなかった読者を益々信じさせなくなるかもしれないと感じる。また私は、ここでは述べなかった或る言いにくい理由によって、世間一般の円盤問題全体が多くの〝でたらめな話〟で固められているとも感じるのだ。そしてこのために、公然と言えば、円盤問題が大きなミステリーとなっているのである。

しかし空飛ぶ円盤の事実は絶対に存在する。われわれのドまん中に宇宙からの訪問者はいるのであって、しかも彼らは或る目的をもって地球へ来ているのである。われわれはこの事実を調査して熟知し、それが投げかける諸問題に取り組んで究極の結論を出すほうがよい。

浅薄な考え方をする人は私がきわめて奇抜な夢を見ていると結論したがるだろう。それとも私が空想科学小説の分野で金もうけをしようとしているのかもしれないと考えたがるだろう。このような人たちに対しては、すべて真実以外の何物でもないと確言することができる。

まず最初に、天空は途方もなく広大であること、地上の諸説を基礎とした心を持つ地上の人々は必然的に宇宙空間で発生している物事に殆ど気づかないということなどを考えられたい。肉眼の視距そのものは短くてあてにならないものである。一般人が空軍機または民間機の去来さえも一体どれほど知っているだろう。とすると多年にわたって数千件にふえた円盤目撃の報告をだれが否定できるだろうか。また増加しつつある円盤写真類の真実性をだれがあえて否定できるか？ 円盤の目撃は世界中で行なわれているのだ。

1952年12月13日に金星人から与えられたメッセージ



しかし私の言葉だけでは前述の物語を裏付けるすべてとはならない。それを確証するために厳粛に待機している証人たちがいるのである。加うるに私は不思議なメッセージの写っている確実な返却フィルムと、やはりナゾめいたメッセージを刻みつけた足跡の型を持っているのだ。私は宇宙人が借りていったフィルムを本人が返してくれると約束したことを仲間たちに伝えた。そして二十三日後に仲間の一人は宇宙人が返してくれてその約束を守った光景を見たのである。しかも私はこの約束された再訪問が実現した事実を立証する写真類を持っている。単なる件数は別として、これ以上に強力な証拠物件を必要としたり、入手できる場所が一体どこにあるだろう。どのように想像しても写真中の飛行体が地球の航空機とは言えないのである。

今や私は宇宙人が再び返って来ることと、その時は相手と話し合うためのもっと多くの時間が与えられることを願っている。たしかに私はいま質問類をためているのだ。友人たちの多くもやはり質問類を準備しつつある。あの大天空の宇宙船に私を実際に乗せるということはあり得ないことだろうか。もし招待されれば文句なしに応ずるだろう。

過去のもろもろの出来事の綿密な分析によって、他の惑星から来たこの人々はわれわれの友人であることを私は確信するようになっている。彼らの欲求や目的は太陽系中の他の惑星群の安全とバランスを確保することのみならず、地球人を援助することと、おそらく地球人自身からも毒されないように地球人を保護する（自滅させないようにする）ことにあると確信する。

しかし地球人が地球上の諸国家間に敵意を持ち続けるならば、そして宇宙空間の同胞（別な惑星の人類）に対して無関心、嘲笑、侵略の態度を示し続けるならば、彼らは如何なる種類の武器にもよらないで、彼らが理解して応用法を知っている宇宙の自然力の巧妙な操作によって、地球人に対して強力な手段を取るかもしれないと確信する。私はかなり弱められて用いられていたこの力にかろうじて触れたが、接触後数週間もその影響を感じていたのだ。

以上の体験を述べるに際して私は次のような真剣な目的を一つ持っている。

本書を読む人のすべてに対する私の最も緊急のメッセージと訴えは次のとおりである。

「われわれは友好的になろうではないか。他の世界から来る人々を認めて歓迎しようではないか！　彼らは地球へ来て、われわれの中にいるのだ。多くの物事を教えてくれる、――しかもわれわれが受け入れさえすれば友人になってくれるこの人々から学びとれるほどに賢明になろうではないか！」

補稿

本書の執筆に従事していた期間中ずっと私は（アダムスキーは）あの象形文字を一生懸命に解読しようと努力していた人々の種々の判読結果を本書に収めようと計画していた。足跡と、空中から落とされたネガのプリントのメッセージの内容を知ろうとして、無数の時間が費され、倦むことのない努力がつくされたのである。

しかし本文の校正が完了しようとする現在、地球人に伝えるべきメッ

セージの内容を知ることに成功したとは研究者のだれも思っていないことが私にわかっている。

この理由のため、記号類を伴った例の足跡と、記号類の写っている落とされたネガのプリントを、参考書のリストと共に本書中に掲載することにした。このリストには数学、天文学、その他の科学で命名されている個々の記号について、非常に新しい定義をくだした辞書が一冊含まれている。

私に与えられた宇宙記号中で主位を占めている〝スワスティカ（注＝卍の記号）〟は北斗七星すなわち大熊座として知られている星座の回転によって形成された天空の一自然現象である。

アーサー・M・ハーディング著〝天文学〟の二八〇頁に、この星座は〝北半球の空の時計〟と述べてあり、同書の二七九頁には「決して停止することなく、ネジを巻く必要のない、常に絶対に正確な天空の時計」と説明してある。

きわめて実際的な見地からすれば、これらの記号はわれわれによってすでに知られている天界の位置を地球人に与えようとしているのかもしれない。それは広大な宇宙空間を現在旅行している人々が進路の目印として利用しているのであろう。

哲学的見地からすれば、これらの記号類は今日地球上の人間が忘れてしまったか、それとも全然知らなかった生命の偉大な秘密を洩らそうとしているのかもしれない。たぶん地球の古代の文明はこうした生命の真理を知っていて、象形文字の形で地球上にその知識を残したのであろう。そしてその意味を伝える記録類が未だに存在しているのであろう。

もしこれらの記号類が性質と意味において宇宙的なものであるならば、宇宙人のメッセージは地球上の記録類から解読されるはずである。

バイブルにはわれわれが持っている物のためにつくさねばならないと述べてある。これは物質的な所有物ばかりではなく不可視な所有物をも含んでいる。「求めよ、さらば与えられん」だ。

また、われわれが今日無知のままに歩んでいる途上で、あらかじめ何かの体験と破壊を経ることの予告が含まれているのかもしれない。

私はこれらの象形文字風の記号類の中には、われわれに伝えられようとしている偉大な知恵がひそんでいると信ずる。また、彼ら宇宙人のメッセージに関心を持ち、その内容を知ろうと真剣に努力している人々は、多くの点で想像以上の多大な結果が報われると信じている。

以上の理由によって今は解読の状況を載せないことにした。しかし私は記号類の解読に努力して、それから何かを得ようとしている人々の解読結果を受け取ることに最大の関心を示すであろう。たぶん、いつか多くの解読結果の編さん書が出されるだろう。だが今は宇宙人のメッセージを別な世界の友から受け取ったとおりのままに読者に提供しよう。そして求めて見出すことの特権を望む人々にそれをおまかせする次第である。

付録

一九五三年六月一日、クォンセット（カマボコ兵舎）T二十六号の米退役軍人管理事務所における会合（注＝ロードアイランド州にある米海軍基地を意味するのかどうかは不明）。出席者は米空軍予備将校団。

テーマは空飛ぶ円盤活動の要約。

講師はワシントン市航空隊の〝プロジェクト・フライイング・ソーサー〟の前広報部長で、空飛ぶ円盤関係広報・公式発表と関係を有する米国防省広報部長のアル・チョップ。

この会合は空飛ぶ円盤関係の事実について予備将校団に概略を説明し、同時に、空軍が追求している情報と観測に関して将校団を教育する目的をもって開催されたものである。

チョップは数週間前に同将校団に対して行なった講演を復習してから、ワシントンとデイトンへの新たな旅行から帰ったばかりであることを述べた。両市において彼は最近の目撃と進展状況について高級将校連と協議したのである。彼は事実発見機関たる空軍の立場を明らかにし、軍はあらゆる虚偽の報告や幻覚等をフルイにかけて、残りの真実な、説明のつかない出来事を選び出して調査・評価を行なっているのであると話した。

チョップの言によれば、これまでに調査済のケースが三千件以上あり、その内二十五パーセントは真実で不可解なものと断定されたといい、空軍がこの空飛ぶ円盤に似た物をひそかに作っているという噂を空軍自身が強く否定したこと、世界の如何なる国といえどもそれを製造していないと断言したことなどを述べた。この言明に対してチョップは、空軍はこの円盤なるものが別な惑星から来ることをなおも強く否定したものの、「来るかもしれない」とほのめかしたと述べた。彼の指摘によると、確実な証拠なくしてかかる言明をなすことは大衆間に証拠の要求をさせることになり、空軍をしてあいまいな立場に置かしむることになるだろうといい、現在見られる難事の一つは円盤現象を調査する第一級の科学者を確保することであるという。これは多数の人が円盤は大気圏外から来るもの——少なくともこの世界のものではない——と信じているにもかかわらず、空軍が大衆の嘲笑を恐れているからである。

チョップは、空軍が当初空飛ぶ円盤に関する調査と公式発表でへまをやったことを認めた。彼の話によると、空軍はこの調査を行なうための設備も準備もしなかったために、調査機関を編成するまでしばらく立往生して、ごまかしの声明を出す必要を感じていた。空軍は公式情報部へレポートを申し込む人に対しては、特殊な円盤ケースのいずれでもその完全なレポートを公表するつもりであり、有能な観測者による新しい目撃の報告すべてを歓迎する。また空軍は未経験な人の目撃報告よりも空軍将校や職員の目撃をより以上に信頼する。ただし確証を提供できるほどの多数の人が同一物を見た場合は別である。

チョップは自分の言葉を検討しながら終始用心深く話したが、或る詳細な点においては言葉を切ったにしても、卒直で真面目であることが感じられた。

メンゼル博士の著書が論じられた。（注＝メンゼルは米国の天文学者で、当時ハーバード大学天文台長。〝空飛ぶ円盤〟という著書を出して、円盤の実在説を徹底的に否定した）メンゼルは空飛ぶ円盤説を固執したフランク・スカリー（注＝〝空飛ぶ円盤の背後にあるもの〟と題する著書を刊行して円盤の着陸コンタクト事件を公表したが、インチキ本として社会から葬り去られた。しかしアダムスキーはこの書の内容が真実であったと言っている）やサイラス・ニュートン（注＝スカリーの書に出てくる電磁気専門家）その他の人々を攻撃した天文学者である。彼は円盤現象を気温の逆転のせいであるとし、その逆転によって地上から大気上層部の氷結粒子に放射される光線の屈折のために、光学的なイルージョンばかりでなくレーダースクリーン上にも種々の結果が現われるのだという。チョップは、メンゼルの著書は流麗に書かれているけれども空軍はその書に一顧をも与えなかった

と述べた。

レーダー手の初歩者でも温度の逆転の影響を発見することができる。しかもこのような条件を作り出すには温度が激烈である必要がある。昨年七月の或る夜ワシントン市の上空に多数の空飛ぶ円盤が出現したが、その時温度の逆転は存在しなかった。これはメンゼルの説を無効とするものである。

ところで右の驚くべき円盤出現事件について、チョップは午後十時に空軍から呼ばれて、発生中の事態を観察するためにワシントンへ急行せよと命じられた。到着してみると、この不思議な物体群が午後八時にワシントン空港の上空にいて、レーダースクリーン上に出現したり消えたりしていたことが判明した。チョップは午前五時まで滞在したが、円盤現象はなおも続いていた。

二機の要撃戦闘機が五十マイル離れたデラウェアーの基地から飛来した。戦闘機も搭載レーダーに物体群を見つけてその光体を肉眼でつきとめた。しかし戦闘機がその地点に飛び込むと、全物体群は即座に消えた。二機とも物体群を探索して飛びまわったが、ついに燃料欠乏のために飛行基地へ引き返さねばならなくなった。すると物体群が以前よりも増加して再び出現した。戦闘機は帰還して無電により物体群を見たと報告した。地上の観測者はレーダースクリーン上にこれらの物体群を見ることはできなかったが、空中にいるのを肉眼で見ることができた。

一人のパイロットがレーダーで一個の物体をキャッチして、のがさないようにし始めた。すると彼は突然、少なくとも半ダースの光る物体群が彼の方に集中して来たと報告した。地上のレーダースクリーン上にも彼の機影と報告どおりの不思議な物体群がそれに集中して来るのが見えた。突然彼は叫んだ。「あれ―っ！ みないなくなったぞ！」この時地上の観測者もレーダースクリーンからこの物体群が消えたのを見たのである。

この突然の消滅の説明として空軍の唯一の説は、物体群は肉眼やレーダーでは追跡できないほどの信じられないようなスピードで真上に上昇したか方向を逆転したということである。この点については二機の戦闘機と並行したコースを飛んでいた円盤を目撃した各パイロットは、それらが別な行動をとった時に形が変化して、細長い形状を呈するように見えたと言っている。これは空中を高速度で進行する物体を写すカメラ中で起こる映像のゆがみではないだろうかとハロルド・シャーマン（注＝メタフィジカル思想の指導者）が尋ねたが、チョップは全く可能なことだと考えている。

ワシントン市上空の数度にわたる出現は、空軍が殆どまたは全然知らないパワーを相手にしているということを軍に確信させるのに絶大な役割を果たした。最も空軍のパイロットたちは、如何なる未確認飛行体をも射ち落とせという命令を受けたが、その後ずっと彼らは、注意深く処理することにして、攻撃されない限り射たないようにと指示されてきたのである。かくて今までに空飛ぶ円盤の背後にひそむ知的存在物は非友好的だという証拠があげられたことはない。それでもこの発端の友好的態度は我々を油断させようという計画かもしれない。ゆえに空軍はこの国を大気圏外から来る侵略者から守る責任を有するのである（注＝これはチョップの個人的見解を示したもので、アダムスキーのクレームとは一切関係ないから、誤解なきようお願いしたい）

この円盤現象を観測している海外諸国も米国へ係員を派遣して空軍や科学者と相談したり、目撃される物体に関する情報交換計画を立案したりした。これまで一般人は当惑してきた。あらゆる真実の報告によって円盤のスピードが信じられぬほどで、飛行中は無音であることが一致しているにもかかわらず。如何なるパワーが用いられているのかはだれも知らないのである。

日中の目撃において最も多く見られるのは銀色である。円盤の色の最も普通の組合せはピカピカ輝く白と赤、白または青と緑であるが、朝鮮上空の目撃類ではパイロットたちはジュークボックスの変化するニジ色と述べている。

これらの円盤が目撃された高度は地球の如何なる航空機でも到達できぬ高さで、時速六千ノット（七千マイル）以上のスピードが多く観測され、計測器具類によって慎重に計られた。

チョップは、円盤を見たけれどもそれについては殆ど詳細を洩らせないという多くのパイロットに話しかけた。彼らは、信じられないほどの機動力をもって機体の上下左右にやって来た種々の大きさの円盤を見て非常に興奮したので、多くの特殊な詳細を思い出せなかった。

シャーマンはアラバマ州上空での巨大な宇宙船の目撃報告について述べた。それには照明された窓々があり、姿のはっきりした乗員がいて、船体の航跡には一機の輸送飛行機がよろめいていた。また彼はデンバーに接近中のパイロットによる一機の宇宙船の最近の目撃に言及して、チョップに対して露骨に次のように尋ねた。円盤が墜落した場合、空軍はその円盤と最初に接触する部門であり、独占的にそれを調査する権利があるのかと。

チョップは言った。空軍はかかる物体の管理権を有しない。それは物体が撃突した地域を管理している陸軍に引き継がれるのである。彼は如何なる円盤墜落をも認めようとはせず、ただ空軍の立場から話したにすぎず、政府の他の部門や科学者が撃突した円盤に接近したのかもしれないという暗示を残した。

チョップはマンテル大尉が円盤を追跡中に不思議な失そうをとげた件について述べた。彼によれば、空軍はマンテルが金星を追跡していて、その時酸素欠乏のために搭乗機が墜落したと報告したという。彼は出席していた飛行将校連からこの説明に対する抗議を受けた。将校連は後日得られた知識を基礎にしてこの問題を再検討すべきであると感じたのである。チョップは、マンテルのこの説明は弱くて、かかる事件を調査している現在の空軍はもっと異なる見解を出すかもしれないと言った。しかし彼はこの事件がかなり以前に発生したために新しい証拠を得ることは不可能であり、それを再調査してもまず目的にかなうことはないだろうという。

チョップはアダムスキーがパロマー付近で望遠鏡取付カメラで撮影した写真を示された。セシル・ド・ミルの〃地上最大のショー〃のカメラマンで、ニュートンの友人であり、第二次大戦中敵機要撃戦闘機司令部のカメラマンとして働いて、一目で日本のゼロ戦その他の敵の飛行機を識別できたペヴ・マーレーは、アダムスキーの円盤写真類はかりにインチキであるとしてもかつて見たことのないほどすばらしいものであり、フーディーニ（注＝米国の偉大な奇術師）の業（わざ）に匹敵するものだと証言した。マーレーの指摘によれば、その写真類の円盤についている影や地面の影（注＝砂漠で撮影した写真）などは驚くべきものであるので、偽造することは不可能であり、このような写真を偽造するには多額の費用のかかる装置を必要とするが、明らかにアダムスキーはそのような装置を所有していないし、かりにその当時所有していたにしても、これほどの結果を得ることは不可能だろうという。

これに対する反ばくとしてチョップは、パロマー天文台には一台のカメラがあって（注＝四六センチのシュミットカメラを意味するらしい）一八〇度の回転マウンティング上で夜どおし空を撮影し続けているが、写真中に円盤が写ったことはないと言った。

ニュートン答えていわく、アダムスキーが撮影した天空の撮影範囲はあまりに高度が低いために、パロマー天文台のカメラではそれを写角内に入れることができず、撮影された円盤の飛行ぶりに対する見方はサンアンドレアス事件の過失（注＝この意味不明）をくり返すものである。ニュートンは、円盤が推進力として地球周囲の磁場を利用しているという自分の説は、円盤の飛行パタンの全世界的規模をもつ研究によって立証されたと考えている。

出席者全員が非常な興味を示した。そして空軍はこれらの円盤がこの世界以外から来ることを非公式に決定したということに全員の意見が一致したのである。

（完）

日本GAP大阪支部大会
盛況裏に終了

八月十五日に恒例の日本GAP大阪支部大会が尼崎市立産業郷土会館で開催された。当会館は昨年七月に開館したばかりの美しい建物であり、平素は日本GAP大阪支部月例会の会場となっている。（ただし毎月第一日曜日だけは京都の久世氏宅が会場となっている）

天候はまばゆいばかりの快晴であった。旧盆や酷暑にもかかわらず続々と参加者が増し、三十数名に達した。

午後一時十分に市川大阪支部代表の挨拶で大会が開会された。今日までの大阪支部の発展を顧みて市川代表は、数々の問題に直面した際にある時は会員各自が自問自答し、また時には巽、久世両先生の指導を受けてこれまで学んできたが、今後も我々の目的である各自の向上を目指して宇宙哲学を学んでいこうという決意を表わされた。

続いて、御多忙の中を出席していただいた巽直道先生のお話となる。「哲学とは知恵を愛するものである」と〝宇宙哲学〟第一章第一行を引用され、知恵と知識は異なり、知識はそれを実際に生かし、応用して初めて知恵となる。我々は〝宇宙哲学〟を実際に自分の生活に実践して学んでゆかねばならぬと、貴重な指針を与えられた。

続いて久保田代表の挨拶。この「知らせる運動」ともいうべき日本GAPが発足して今年で十年になるが、今思うと昨日のようで少しも才月を感じない。まだまだこれからであると、青年の心境でおられる事を一同に感じさせた。米国GAP本部の活動状況の報告の後、このGAPは単に片手間の趣味的団体ではなく、地球人類へ働きかける理想主義的団体であると宣言された。

次いで代表は一息休む間もなく宇宙哲学について講話をされた。信念、記憶について話された後、以前機関誌に紹介された想念観察法を説明されたその実践にあたった時の経験談は我々にとって非常に参考になる有益なものであった。

参加者全員の自己紹介、座談会に移った。人数が多い事と時間も長く取れなかったので、各自簡単な挨拶となったが、京阪神を始め三重、島根、石川、静岡、山口、福岡、東京の諸方面から来られた会員もあり、会員の言葉の端々からこのGAPが単なる円盤熱に浮かされた団体ではなく、宇宙哲学を根底とする活動を行なってきたことを証明していた。

記念写真の撮影となったが、当会場はかなり大きいにもかかわらず、全員をカメラに収めるのに写真屋さんが苦労するという一幕もあった。

斎藤雄久氏の円盤実写フィルムを上映の予定であったが、斎藤氏が急病になられて大会に出席できなくなったのでやむなく中止となり、かわってGAP編集のスライドを上映した。このスライドは前半は英国を中心にブラジル、アルゼンチンなどで最近起こった円盤の目撃ニュースを伝え、後半は米国GAP本部や各国GAPの発行している機関誌を紹介して参会者に多大の感銘を与えた。

五時十五分、市川代表の挨拶で閉会となった。一同まだ話し足りない感がしないではなかったが、次回の大会や大阪支部月例会に再会を約して散会した。（竹島　正記）

当日参会者の氏名は次のとおり。（順序は受付名簿記載順とす。敬称略）

市川　宏（尼崎市）、市川淑一（同氏長男）、竹島　正（千葉県）、大野金三郎（神戸市）
石橋秀次郎（石川県）、矢野勝己（神戸市）
大植寿善（羽曳野市）、三好俊雄（神戸市）
三木元一（神戸市）、沖　昌克（静岡県）
斎藤康美（茨木市）、斎藤俊一（同）
広田佳司（奈良県）、片野純而（和歌山市）
井上芳人（東大阪市）、田島康次郎（広島県）
千原愛泉（京都市）、宮地　勝（愛知県）
小島和彦（大阪府）、稲東武彦（大阪府）
牧野繁雄（埼玉県）、中山正史（神奈川県）
藤原孝幸（島根県）、藤原恵美子（同氏妹）
安部雅子（山口市）、梶本宣昭（大阪府）
望月ひろし（西宮市）、中村健三（北九州市）
山上賢二（姫路市）、塩原　勲（守口市）
上島正義（亀山市）、川池昭博（大阪市）
重松昭春（豊岡市）、巽　直道（神戸市）
久世章業（京都市）、久保田八郎（東京都）

計三十六名

八月十四日午前八時十分に東京駅から〝こだま〟で西下した。同行者は中山君と牧野君である。竹島君は都合により十五日朝出発するという。地方のお盆なのに列車は意外に空いていて、快適な旅になった。東京から地方へ出るのは丸一年目の私にとって汽車旅行が楽しくて仕様がなく、「新幹線は速いなあ」などと言っているうちに正午には京都へ着いた。市川大阪支部代表と久世先生のお出迎えを受けて恐縮する。一同そろって昼食後、宿舎に荷物をあずけた後、その日午後一杯は史跡見学にあてることになり、コース計画について久世先生におうかがいすると「大原寂光院にきめてある」とのこと、私は狂喜した。かねてから寂光院見学を切望していたからである。私の想念が先生に通じたのかな。炎天下ではあったが大原の美しい静純な野辺を打ちつれだって徒歩で行く時の楽しさはたとえようもなく、結局互いに志を同じくする盟友のつどいであるからこのような雰囲気が生じるのだろうと考えながら歩いた。

寂光院は建礼門院が愛児安徳帝の没後、仏道に励んで亡き平家一門の冥福を祈りながら晩年をすごされた有名な場所である。多くの人がつめかけていたが、環境は俗化されておらず、ほぼ昔のままの形を保っている。豊臣時代に淀君の願によって修築されたものの、内部の仏壇周辺は元のままだと案内人が言う。中央の大きな仏像の前で建礼門院の両眼が常に存在していたと思われる空間の一点を探り出そうと苦心したが、確信は得られない。仏壇の左側奥に安置してある女院自作のレリーフの肖像を凝視している内に、壇の浦の哀史の現実感がほうはいとしてわき起こってきた。万感胸に迫って佇立する—。あまりに名文なるがゆえに何度読んでもピンとこなかった平家物語の後白河院行幸のくだりの真ぴょう性が何となく感じられるような気がする。あの物語の内容に関しては疑惑があったのだ。—次にクラ馬寺に向かった。

現地に着いてみると夕方の事とてすでにケーブルカーが運転中止となっていて、山頂近くの寺まで八百メートルの急な山道を徒歩で登ることになった。登山中はエライ目にあったが、一行中で最も壮健ぶりを発揮されたのは何と七十数才の久世先生で、これには一同驚いてしまった。先生は健康保持の特殊な方法を実践しておられるらしいが、詳細はお聞きしなかった。夕暮のクラマ山は爽快で、東京では味わえない新鮮な空気を充分に吸い込んで山を降りた。

宿舎へ帰ると意外にも藤原孝幸君と妹さんが来ておられ、同夜は遅くまで語り合って、翌日は同君らと共に午前中銀閣寺へ見学に行ったが、これも実に楽しいひとときであった。

午後一時前に会場へ到着して、約十分遅れて会が開かれた。どうしたわけか心が落ち着かず、何ともいえぬ焦燥感にかられるが、どうにもならない。安部雅子さんが後によこされたお手紙によると別人の声のようだったという。原稿通りにしゃべろうとしても、なぜか横道へそれてゆくような気がする。

今回は開会を午後一時ときめたが、これは失敗であった。もちろん私の責任である。午前中から開始してもっと時間の余裕を持つべきであった。このため座談会はフイになってしまった。まことに申訳ない。折角遠方から来られた方が多いのにディスカッションができなかったのは残念である。ここで深謝すると共に、お世話になった方々に厚く御礼を申し上げる次第である。（久保田八郎記）

講演中の久保田代表

記念写真．前列向かって左から4人目が久世先生．その右久保田代表，巽先生，市川大阪支部代表．右方に見事な円盤の模型を持つのは製作者の斎藤俊一氏．

昭和46年度総会を開催

ふるって御参加のほどを！

今年も恒例の日本GAP総会を次の要領によって開催することになりました。UFO問題やアダムスキー哲学に関心をお持ちの方にとっては信念を強めるのに良き機会となりますので、都内及び近郊の方はぜひ御参加下さい。会員以外の方でも関心のある方なら御来場を歓迎いたします。今度の総会では特にエーリッヒ・フォン・デニケンの著書〝神々の戦車〟（本誌第四十六号の編集後記で紹介済）の姉妹篇の実写映画〝未来の記憶〟を上映いたします。これは古代に宇宙人と関係があったと思われる地球上各地の遺跡をドイツ撮影隊がフィルムに収めたもので、本格的三十五ミリのカラー映画（映画館で上映されるものと同規格のフィルム）により、不思議なすばらしい画面が展開します。一般映画館では上映されない貴重な記録映画ですからぜひ御覧下さい。詳細は左頁を！

日時　十月三十一日（日曜日）午後一時より七時まで。

会場　豊島区民センター（池袋駅東口・三越デパート裏手）

会費　大人六〇〇円。高校生以下四〇〇円。

（他に夕食費と、記念写真購入希望者は一五〇円程度を準備されたい。会場入口の受付で会費を納入して名簿記入の上、赤い片の記章を受け取る仕組）

プログラム

司会　三田堯一

第1部

◎豊島区民センター4階会議室

（1）　1, 00　開会挨拶

（2）　1, 05 — 2, 25　講演　韮沢潤一郎　「月はまだ生きている」

〃　安斎　純夫　「金星より見た未来社会」

（各20分あて）

〃　市川　宏　「大阪支部の現況」

〃　久保田八郎　「アダムスキーの哲学」

（3）　2, 30 — 3, 20　座談会　（質疑応答，意見発表等を含む）

—休　憩—

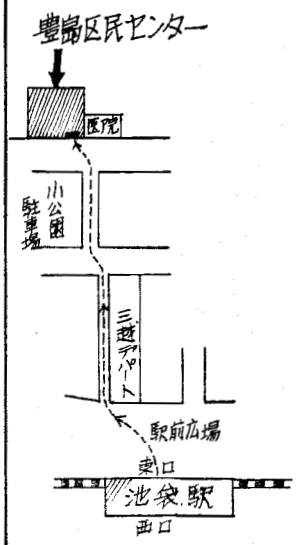
（4）　3, 30 — 4, 00　円盤スライド上映

（5）　4, 00 — 4, 30　記念写真撮影

第2部　—夕食・休憩—

◎同センター6階文化ホールに会場を変更

（6）　5, 30 — 7, 00　映画上映　「未来の記憶」



注意

◎センター入口の奥右手にエレベーターがあるので利用されたい．（エレベーターガール付き）

◎4階会議室は4,30までしか使用できないので，この室を出る時は持物を全部携行されたい．

◎夕食はセンター内の食堂または付近の食堂を各自で利用されたい，

◎5,30以後の映画会場は同センター内の6階文化ホールとなるので，会場を間違えないこと．

＊11月の月例研究会は中止するので，ご了解をお願いしたい．

● 未来の記憶

解説

神々は星々から飛来したのではなかろうか。私たちの地球は先史時代に神々が訪れた痕跡を無数に秘めているのではないだろうか。だとすれば、神々の地球への第一歩はいつ印されたのだろう。また彼らが用いた技術は現代の人類のそれをはるかに凌駕するものであったはずだ。

ドイツのＳＦ作家で考古学者のエーリッヒ・フォン・デニケンは上のような問を発した。彼の主張と多くの例証を盛った２冊の書「未来の記憶」と「星への帰還」はベストセラーとなり、１４カ国語に翻訳された。（邦訳版は早川書房から刊行中）

デニケンの主張は次のように要約することができる。地球以外の天体から何者かが先史時代の地球にやって来て、人類に神々として崇拝された。その証拠はほとんどの民族の神話に、もろもろの宗教の聖典に、そして考古学の発掘物にまがいようもなく認められる。

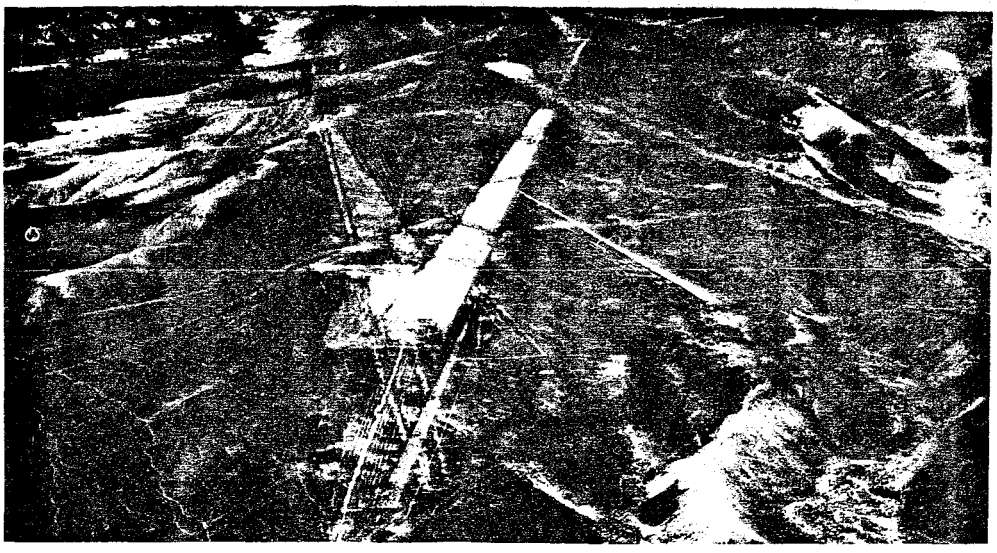
ハラルト・ハインルの監督のもとに「未来の記憶」の撮影班は、丸１年を費す５大陸をめぐっての大撮影旅行を敢行して、デニケンの主張を裏付ける証拠資料を集めて見事なカラー記録映画としたのである。ＵＦＯ研究家必見の名画といえよう。

スタッフ

制　作　テラフィルムクンスト　1970年度作品
監　督　ハラルト・ラインル
撮　影　エルンスト・ヴィルト
音　楽　ペーター・トーマス
編　集　ヘルマン・ハラー
語り手　ヴィルヘルム・ロガースドルフ

カラー９３分

写真は南米の奥地に残る古代の不思議な遺跡．飛行機の滑走路を思わせるこの直線コースは宇宙船の発着場ではなかったかという．映画「未来の記憶」の１コマより．



日本GAP月例研究会

日本GAPは左記のとおり東京と大阪支部の二個所で月例研究会を開催して会員の研修を行なっている。特にUFO関係のスライド映写も実施しているが、貴重な資料をスライドで公開しているのは我国では日本GAPだけであり、希少価値が高いものと信ずる。都府内外近郊の方はぜひ参加されたい。

東京例会

1. 日時　毎月第一日曜日、午後一時より四時半まで。（ただし十一月だけは例会を中止しますから、間違えぬようご注意下さい）
2. 会場　豊島区民センター四階会議室。（国電池袋駅の東口下車。三越デパートの左横の道を奥へ奥へと行けばよい）
3. 会費　百五十円。茶菓が出る。
4. 携行品　テキストとして「宇宙哲学」を持参のこと。講師は久保田代表。

◎代表挨拶、経過報告、「宇宙哲学」研究、質疑応答、自己紹介、座談会、スライド映写の順。

✻　✻

大阪支部例会

1. 日時　毎月第一日曜日と第三日曜日の二回開催。午後一時より京都会場は五時まで、尼崎会場は四時まで。
2. 会場　第一日曜日＝京都市北区上加茂、山本町五〇　久世章業宅（電話〇七五—七八一—七二八八　京都駅西口よりバス2番または9番に乗り、〝上加茂ミソノ橋〟バス停で下車。橋を渡り、上加茂診療所の隣り）
　第三日曜日＝兵庫県尼崎市　尼崎産業郷土会館　（阪神電車〝大物駅〟にて下車。すぐ北側）
3. 会費　いずれも百円。
4. 携行品　テキストとして京都会場は「生命の科学」、尼崎会場は「宇宙哲学」を持参のこと。

注意　右のとおり大阪支部例会は会場が二個所あるので注意されたい。

アダムスキー哲学三大名著！

絶賛発売中

スペースブラザーズから伝えられた宇宙的思惟法と宇宙的な生き方とを三部に分けて詳述。GAP会員必携の書。注文は各出版元へ直接にどうぞ。

宇宙哲学

¥350　〒45

東京都新宿区納戸町33　たま出版

生命の科学

¥420　〒55

テレパシー

¥290　〒45

東京都文京区白山1—29—12　文久書林

本誌旧号

本誌バックナンバー（旧号）は次のものが在庫。部数僅少につき未入手の方は早目にご注文のほどを。送料は不要。低額切手代用にてもOK。　各¥200

第43号、44号、45号、46号

★在ニューヨークの宮内温夫君の「宇宙哲学画集」は好評裏に品切れになりました。厚く御礼を申し上げます。

「宇宙哲学」はアダムスキー哲学の基本的原理を説いた、人間と宇宙との関係を解明した一大金字塔。「生命の科学」は宇宙哲学の実生活における応用法を詳述した書。「テレパシー」は超人的な感受能力の開発法を説いた指導書。この3部によって宇宙的哲学が完成する。

編集後記

◎長くお待たせ致して申訳ありませんでしたが、ここにやっと第四十七号をお送りできることになりました。会員各位から平素は多大の御支援にあずかりながらひどく発行が遅れたことをお詫び致します。本号は頁数の増加を図って三十六頁としました。多少とも充実した点を認めていただければ幸いに存じます。

◎ステックリングの「なぜ彼らは来るのか」は、いよいよ〝質疑応答〟の佳境に入りました。次号で完結の予定で、いずれ一本にまとめて出版する計画です。本誌記事中の皮底グツの効用には興味深いものがあります。なお、文中皮グツとあるのは皮底グツの意味ですから、ご注意下さい。

◎「クレメント十五世」は都合により掲載を中止しますから、悪しからずご了承下さい。

◎比較的最近の円盤出現事件で、アルジェンティンとブラジルの二件を掲載しました。紙数の制限によりこれらの記事の全文を載せきれなかったのは残念ですが、UFO出現の事実については充分に真ぴょう性を持つものと信じます。この二件は専門家によって徹底的に調査された結果、事実と断定されたものです。

見記」も本号で完結

最後の〝付録〟でもって

ありまして、これは重要な部分です。ただし紙数の都合により〝付録〟中二十行ばかりを省略しました。他の部分はすべて全訳で、原文に忠実な訳出を試みたつもりです。翻訳をナリワイとしている編者の意見では、英文和訳の翻訳文というものは必ずしもこなれた名訳を行なう必要はなく、重要な内容であればあるほど平易な直訳調が迫力があります。次号からは「空飛ぶ円盤同乗記」の改訳を連載の予定です。高文社版の同書は編者がむかし若き日の情熱を傾けてやった仕事で、美文調に走ったために、或る対抗グループが「あのような美辞麗句を用いたアダムスキーはイカサマ師に違いない」といって編者を苦笑させたことがありましたが、今度は平易な文体による訳をやるつもりです。ご期待下さい。これらの原書を入手希望の方は本誌第四十五号の入手法に関する記事をごらん下さい。

◎本号から題号を再び〝GAPニューズレター〟と元通りの誌名にしました。度々変更して申訳ありませんが、〝コズモス〟というのは短歌か俳句誌のような印象を与えるためにやむなく変えた次第です。今後は変更なしにこのネームを続けます。略称は「NL」とします。

◎次号より値上げ　本誌発行には依然として資金難が続いておりますので、

すのでご了承下さい。物価高騰もさることながら、資金不足は如何ともしがたく、皆様のご協力をお願い致す次第です。大体本誌一回の発行に際して要する費用は一般的な方法によるものとして計算しますと概算次のとおりです。翻訳料（安く見積って）三万円、タイプ打製版料三万五千円、印刷費五万円、雑費（写植料金、写真原稿製作費、その他を含む）一万円、計十二万五千円。ところが会費納入と寄付金だけでは五、六万円のブールが限度で、残額六、七万円は完全な赤字になるわけで、これでは発行不可能ですから、編者みずから翻訳、タイプ打製版、写真原稿の作成等を行なうことによって赤字分相当の労力を提供して（いわばその金額を寄付して）赤字の補てんをしているわけです。日中勤務の余暇を利用して行なう仕事ですから編者の個人的な自由時間は殆ど得られませんが、元来本誌発行は非営利目的の奉仕作業であるために労力の提供はいとわないものの、若干の値上げによって幾分とも赤字の軽減を図り、発行を続けて多くの人に読んでいただこうという寸法です。よろしくお願い致します。御寄付は喜んでお受け仕ります。

◎もちろん本誌発行がここまで継続できたのは多数の会員各位の絶大な御援助のたまものでありまして、心から感謝致しております。誌上より厚く御礼を申し上げる次第です。

業郷土会館で大阪支部大会を開催し、盛況裏に終了して関係者各位に深謝仕ります。

◎恒例の日本GAP総会を今年も盛大に挙行することになりました。今回は本会発足十周年記念として特にドイツのすばらしい記録映画を上映する予定ですから、多数ご来場をお待ちしております。詳細は本号三十四頁にあります。

◎月例研究会も東京と関西（京都と尼崎）で実施されています。近くの方のご参加をおすすめします。時には同好の士と話し合うことによって益する所があるかもしれません。ただし東京の十一月における月例研究会は、十月末に総会開催のため、中止しますからご注意下さい。十二月から再び研究会を開きます。

◎在カナダの古山晴久君から便りあり。元気で活躍中との由。近い内カリフォルニアへ行ってシャーロット・ブロッブに会うつもりだとのことでした。

◎アダムスキー哲学に関して単なる随想でなく、実生活で応用して何らかの結果を得た方は報告をお寄せ下さい。

GAPニューズレター　47号
10・1971
編集発行人　久保田八郎
発行所　日本GAP
東京都江戸川区篠崎六ー二三一
振替　東京三五九一一二
（久保田八郎個人名義）
頒価二〇〇円・送料三五円